

# VALSHNA

## ヴァルシュナ



文 : megaroad77  
画 : GEJIGE

## 第0話：プロローグ

---

天の城にアマミクという神がいました。

天帝はアマミクを呼んで、下界に降りて島を作ることを命じました。

地上には土地はあるけれども、東西の海の波がその土地を越えていくような状態で、まだ島にはなっていませんでした。

アマミクは天に上り、天帝から土と石と草と木をもらってきて島を作りました。まず一番にヘドのヤスモリ、次にナキジンのカナヒヤブ、次にウタキを作りました。

それから数万年経っても人が生まれないため、アマミクはまた天に上り人間の種子を天帝に乞います。

天帝は子どもの男女の神をアマミクに下されます。

女神の方は吹き通る風によって3人の男と2人の女を生みます。

長男は天孫氏として王となり、次男は按司（アジ）の始め、三男は百姓の始めとなりました。女性の方は長女が君々と呼ばれる最高神女の始め、次女は祝々（のろのろ）という地域にいる神女の始めとなりました。

『中山世鑑』より

## 第1話：灰色の空と雲

---



眼下に広がる雲、色は灰色。この数十年白い雲なんて見たことが無い。

大気汚染の悪化、世界各地での紛争...色々な要素が加わって地上から見上げる空は灰色の雲に灰色の空となってしまった。

今、俺は戦闘機のコックピットに身を置いている。滑走路から離陸し、機体を60°上向きにして一気に高度を上げる。

離陸してものの数秒でその灰色の雲に突っ込む。

戦闘機のコックピットと言うのは旅客機や輸送機のような小さい窓とは違い180°の視界が確保される涙滴型のキャノピーで覆われている。

その為、自分自身が空を飛んでいるような感覚がおきる事がある。

灰色の雲の中を抜け、雲の上に出ると地上で見るとより青い空が見える。

高度を上げ続けると青色がだんだん濃くなり、青色を通り越して黒になってしまう。

正体不明の航空機が日本の領空に進入する時は大抵空が黒く宇宙に出たかと勘違いするほどの高高度。

この空が殆ど黒に見えるような高度だ。約5万フィート。

空気中の成分を元に燃焼するエンジンを使用しているこの戦闘機は、空気が薄い高高度まで上がると能力が落ちる。

案の定、上昇率がだんだんと落ちてきた。

本来はこんな高高度で運用する機体ではないのだが...

現在位置は伊豆半島から八丈島の間くらい。

俺1機だけでなく、俺の後方、右側と左側に一機ずつそれぞれが三角形頂点に位置した形で編隊を組みながら徐々に高度を上げている所だ。

俺たちが乗っている新型の戦闘機は日本とアメリカ共同開発となっているが、実際にはエンジン以外の8割が日本の技術だ。

でも、アメリカは共同開発だからと言うことで、その技術の無償提供を日本に迫った。

さもなければ、新型エンジンとその制御ソフトウェアの提供をしない。

と、脅しをかけたのだ。

このエンジンがこの戦闘機の要で、このエンジンのおかげで今までの戦闘機とは違う事が出来る。  
だから、日本側は泣く泣く条件を飲んだ。

今は西暦2245年。

世界は3世紀ぶりの大きな戦争の危機に面している。

中東を始めとした共産圏の国々が共同体を組、アメリカやEU諸国、それに日本を始めとする西側に属している諸国家に対して戦闘を仕掛け始めた。

今現在、攻撃を仕掛けているのはまだ中東の一部の国だが、裏で赤い大国が糸を引いているのは明らかである。

もちろん、日本だって他人事では無くなった。

大陸の北に位置する某大国は未だに沈黙しているが、その大陸に突き出た形の半島の国が少し事情が複雑。

数年前まで北と南に分かれていたその国は、今世紀でついに統一がなされた。

当初は金のある南が主導権を握っていたが、統合した事によって北と南の国力の差がまずい方向へ。

すぐにクーデターが勃発。軍事力では北の方に分があり、北の自称「正統政府」が首都を制圧し、主権を奪った。

この事件により、半島まるごと赤色に染まってしまった。

南のGNPやら何やらが全て半島全てに均一化されたが、その多くは軍事力へ転換されてしまい、国民は一気に貧困にあえぎ始め一部の金持ちは国外へ逃げた。

そして、一気に軍事国家へと変貌する。

今はまだ国内が安定しないのか、軍事力を外へ向ける気配は無い。

これで、大陸の東側の殆どが共産主義国家になってしまい、日本が民主主義の砦となった事でアメリカは否応無く日本まで守らなくてはならない状態になった。

それよりも、どこの国かわからない潜水空母が太平洋をうろちょろしている方が一番の脅威だ。潜水空母と連携している潜水艦はどう見ても大陸のアノ国製にそっくりなのだが、運用している人間が中東の人間らしい

いきなり、日本の領海に進入してきたと思ったら搭載されている戦闘機を射出し小笠原諸島の島々を攻撃する。

殆ど挑発程度の散発的な攻撃だ。何かの陽動かとも勘ぐっている。

最近では首都近くまで侵入し迎撃機と戦闘をする事もある。日本に対しては明確に戦闘を行うつもりではなく、日本の後ろにいるアメリカに対して挑発しているのでは？と言う意見すらある。

ただ、おかげで小笠原の住民たちは内地に疎開する羽目になってしまった。

太平洋は基本的にアメリカの太平洋艦隊が受け持っているが、広い太平洋で自国領も守りつつ、主戦場が中東やアフリカなので、おのずと日本の側の守備が疎かになる。

改正された日米安保条約があるとは言っても、やはり自国が優先なので第5艦隊が援軍を要請すると、すぐに空母1隻を残して居なくなってしまう。

日本は日本海側が一番の脅威とし、近年日本海側と東シナ海へ軍事力を集中しており、太平洋側が手薄になってしまった。

これは、日米安保をあてにしていた政治家が悪いのだけど...

その為、関東を中心とし、小笠原や沖ノ鳥島までを防衛範囲とした新たな飛行隊を設立し、木更津に基地を設ける事となった。

領空を侵犯したお客さんは実は友軍であるアメリカさん。

現在、日本に唯一残っている第7艦隊所属、原子力空母「サラトガII」から発進した哨戒機。

隠密で動いていた為、識別信号をカットしていたらしい。

迷惑な話だ。

本来、スクランブルは同じ木更津基地に配備しているF-202Jと言う戦闘機が担当しているが、丁度、俺らが乗っているこの機体が配備されたばかりでテストフライトで離陸の準備をしている所へスクランブルがかかった。

本来なら木更津の管制はスクランブル待機中の連中を優先で出撃させ、俺らは滑走路を譲って待機に入るはず。

しかし、何故かそのままスクランブルの任に付く事になってしまった。

戦闘がなかったからいいようなもの...

お客さんが帰る所を確認し、そのまま本来のテストフライトの航路へ移る。

高度をいっきに下げ、またあの灰色の雲を突き抜けると視界に八丈島が入る。

八丈島の南側5キロ程の距離に演習用の人工の島がある。

そこで、実弾を使用したテストを行う予定。

テストに使う兵装は機首のヴァルカン砲と翼下のハードポイントにぶら下げた対空、対地ミサイル（いずれも実弾）

そして...

『こちらノース3、レーダーコンタクト！アンノウン3！』

寮機の3号機より無線が入る。

自分も前面のパネルに付いている液晶モニタのレーダーを確認。

『こちらノーズ1、こちらでも確認した...木更津コントロール、聞こえるか？八丈島沖南東12』

キロの位置でアンノウン、3機』

1秒ほどの空電ノイズの後、木更津コントロールより、返信が入る。

『木更津コントロール、現時刻にその空域のフライト情報は無い、出迎えを頼む。』

また、アメリカさんじゃないだろうな？

レーダーに映る光点の速度が速い。しかも、進路をわざわざこちらに修正してきた。

まさか...交戦する可能性がある。ここは俺たちの出番ではない。基地のF-202の飛行隊に出張ってもらった方が良くもしいない。

無線のを国際緊急周波数の121.5MHzへチューニング。

「This is JapanAIRForce It is airspace in Japan, and evacuate it promptly.」

領空からの退去を促すメッセージを3回繰り返した。

しかし、光点は相変わらずこっちへ向かってくる。

レーダーのレンジがロングよりミドルに自動で切り替わる。

『木更津コントロール、ヤバイ！実戦になるかもしれん。こっちはまだテスト中の機体だ、帰還の許可を。』

『とりあえず、スクランブラーは向かわせるが、良い機会だから迎撃を頼む。ちょうど実弾を装備してるじゃないか。』

『...（マジか？）ノーズ1、コピー』

くそー誰の指示だ？

この機体は今日、基地に配備されたばかりで、しかもエンジンのあたりだっけつけていない。そんな状態で実戦だ？

しかも、俺も含めてこのチームは実戦を経験した奴は居ない。

まだ、スクランブル待機中で今、この空域に向かって来ているF-202の部隊が実戦経験がある。

しかし、俺自身この時点で気づいたが初めての機体で初めての实戦なのに恐怖は無い。

逆の感情なら体の内側から湧いてきている。

この機体のパイロットに決まって、訓練を受けている時に考えていた事がある。

それを試すいい機会かもしれない。

『アンノウン、急速接近。10秒後ヘッドオン。』

『IFF応答なし。エネミーと断定。IRシーカーモーニングコール！』

3機の正体不明機...いや、敵機は肉眼で点にしか見えない距離に居たはずだが次の瞬間には俺達の編隊とすれ違った。

お互い亜音速だと、すれ違うのも一瞬だ。

衝撃が機体を振るわす。

すれ違った機体はMig-29の復刻機。

復刻といえは聞こえはいいが、20世紀の戦闘機がレストアされて未だに使用されていると言う骨董品だ。

金の無い国が主に運用しているらしいが、それは単なるうわさ。

エンジンとアピオニクス関連は全て現在の技術が使われていると言う。

実際に空中戦を行うと、とても大昔に設計された機体とは思えない動きをする。

恐らく、新型機程ではないが、かなり金がかかっているはずだ。

『各機、ブレイク』

寮機が左右に分かれる。俺は操縦桿を手前一杯に引き、スロットルレバーをMAXへ押し込む。

機体のピッチ角がどんどん上がる。

60°、70°、80、90、真上に向いているがさらに操縦桿を引き続ける。

80、70、60、50、40、30、20、10°...0°

機体は上下逆さまのまま水平へ、

手前に引いていた操縦桿を一旦ニュートラルに戻し、すぐに右に倒した。

機体は右へロールし、水平になったところでまた、ニュートラルへ。

インメルマントーン。手っ取り早く180°方向転換を行うのにはこの方法がいい。頭に血が上るのを除けば...

『PANPANPANI!木更津コントロールよりノーズチーム!方位110より新たな未確認接近!数は4機!戦闘を中止し帰還せよ!後は現地へ急行中のイレースチームへ任せろ!』

もう遅い。戦闘状態に入っているのにこの場から離脱する事は出来ない。

新たな敵は既にこちらのレーダー圏内に入っている。

恐らく、味方が到着するより5秒ほど早く敵が戦闘空域に入ってしまうだろう。

目の前の敵を手早く片付け、新たな敵が到着する前にこの場から逃げ出すのが生き残る唯一の方法。

『ノース1、エンゲージ!』

『シーカーオープン!ロックオン!フォックス2!』

山本と言うナンバー2の奴は既にミサイルを放っている。

その直後視界の隅で爆発の光が見えた。

『ビンゴ。』

『グッキル!』

後続の敵が来るまであと数秒...それまでに俺も1機は落としておかなければ。

俺の目の前の敵は右に左に機体を振っているが、俺もその動きに合わせる。

互いの飛行機雲が交互に混じり、遠くからみたら∞マークが沢山繋がっているように見えただろう。

そんなシザース運動もすぐに終わりになる。

敵の機体が反転させるタイミングが一瞬遅れ、俺の機体の動きと重なる。

距離は割と近い。

操縦桿の親指の位置にあるホイールを親指で回し、武器のセレクタをヴァルカンへ切り替える。

HUD(ヘッドアップディスプレイ)には【RDY GUN】と言う文字が表示される。

HUDに映し出されているシンボルがミサイル用から機関砲用へ表示が変わり、弾道の未来位置を示すラインが引かれた

そのラインの先で敵機が重なった。

ホイールのすぐ側にある安全装置を親指で押し込む。

この安全装置のボタンを押している間だけ人差し指にかかっているトリガーを引く事が出来る。

俺は躊躇せず、そのまま引き金を引いた。

機首に装備されているヴァルカンを回転させるモーターの音、火薬の爆発音、20mmの弾丸が空を切る音が混ざり、どの楽器も出しえない死のハーモニーを奏でる。

同時にヴァルカンから複数の点のようになった光が敵機に向かって伸びてゆく。

曳航弾の光だ。

10発に1発の割合で装弾されているが、1秒間に60発以上発射が可能なヴァルカンでは殆ど1本の光のように見える。

この、音と光が生み出すのは皮肉にも破壊と死。『スプラッシュワン！』

初めての实战で敵を撃墜した。

喜び間もなくコックピット内にアラームが鳴り響く。

ミサイルの接近警報！？

『ノーズ1！ミサイル！ブレイク！ブレイク！』

声は山本、

反転降下、ついでにフレアも放出。

フレアはタイミングが合わず、ミサイルは騙されなかった。

すぐさま急上昇

エンジンを臨界まで回す。

重い機体は上昇するのは苦手。

再度フレアを6発ほど放出しながら左手のスロットルレバーのすぐ横に付いている黄色と黒で彩色されたレバーを手前に引く。

機体下部に付いている2基のエンジンプロックが後方へ伸び、外側へ少し移動する。

エンジンプロックとは上下反対側の機体上部に付いている2つのエアークラウドが入り口を軸にして90度外側へ回転。

そのインテークの外側の端からは「掌」が出てくる。コックピット後方部が前方へ伸び、コックピット丸ごと覆い隠し「頭」が出現する。

「足」となったエンジンプロックの「太腿」に当たる部分の装甲が開き内部に収納されている折り畳み型の「ガトリングガン」を「手」が掴む。

普通の戦闘機のシルエットが今では人型のシルエットへ変わっている。

足の裏から青い排炎を出し、戦闘機の推力となっていた炎は人型の物体を空中に浮かす為の推力へ。

そして、足の動きと腕を振る勢いで180度後ろを向きガトリングガンをミサイルへと向ける。



ここまでの動きはほんの1秒。

しかし、ミサイルが接近している状況での1秒は命取り。

自動照準装置がミサイルをロックする。

ロックと殆ど同時に引き金を引く。

「ガトリングガン」は55mmの弾丸を発射する3連銃身砲。

ミサイルは殆ど目の前に迫っていたが、間一髪で迎撃に成功。

爆風で機体のバランスがくずれたので、慌てて人型から戦闘機の状態に戻す。

2030年代後半、新しい兵器が誕生した。

それまで、地上で最強を謳っていた戦車の存在を脅かすほどの兵器。

開発したのは日本。実戦運用を初めて行ったのはアメリカ。

全長はおよそ10m。2本の足を持つ人の形に酷似したシルエットを持つ鉄の巨人。

俗な呼び方をすれば『ロボット』

その巨体に似合わず機動性が高く平坦な場所なら80Kmの速度で走る事が可能。

人工筋肉による瞬発力、跳躍力が戦車と違う所で、その力はガスタービンエンジンより発電される電力と比例する。

戦車より軽く丈夫な装甲。最新の技術で小型化されたスーパーコンピュータ。戦車以上の火力を持ち戦場を選ばない汎用性。

まさに。地上最強。

その最強の兵器は正式な名称が決まっておらず、大体は「アーマー」と呼ぶ事が多い。

しかし、唯一の天敵は固定翼の航空機。所謂ジェット機。

なんせ、攻撃機は速度が速過ぎるので、いくら機動性が高くても対処しづらいのだ。

攻撃機に狙われると逃げることで精一杯。

弱点はそれだけではない。

移動距離が極端に短いのだ。

燃料の問題では無く、その構造に問題がある。

乗り心地が非常に悪く、操縦する人間は長く乗ってられない。

操縦席周辺には多少ショックアブソヴァーや衝撃吸収装置などが施されてはいるが、それでも1時間が限界。

実は、そういった弱点は別に重要度は高くない。

移動に関しては専用のトランスポータとか輸送ヘリを使用すればよいし、攻撃機相手だって20mmクラスの機関砲やヴァルカンではアーマーに使用される装甲の前では殆ど約に立たない。

但し、一部の攻撃機に搭載されている30mmくらいになるとちょっとヤバイ。

まあ、とにかくそういう弱点を克服した上に強襲性をくわえ、尚且つマルチな戦闘が行える事を前提としたアーマーが...いや、戦闘機が開発された。

それが、今俺が乗っているハイブリット戦闘機、形式番号が『F/α-005A』通称『VALSHNA（ヴァルシュナ）』

制空戦闘機としての運用がメインだが、機体形状をアーマーへと変形させ地上戦を行う事も可能。

配備数がまだ絶対的に少ないアーマーの隙を埋める形で運用する。

防衛として配備されているアーマーの行動範囲外に、敵が上陸した場合、速やかに迎撃できるようにと考えられて開発された。

その為、戦闘機としては重量が重く、アーマーとしては軽い。

装甲もいくら特殊装甲を使用しているとは言え、アーマーとしては防御力も低い方だ。

しかし、機動性は従来のアーマーに比べ数段上だ。

アーマーとしての重量の軽さにくわえ、人工筋肉自体も新開発の素材を使用し、その上で瞬発力を高める為の工夫がされている。

そんなヴァルシュナも色々と制限事項がある。

肝心の「変形」のシステムもその一つで、実は変形を行うには色々と条件がある。

対地速度が700Km/h以下じゃないと駄目とか、高度も0フィート以上400フィート以下。

この条件から外れても別に変形機構が作動しない訳ではない。

単に、コンピュータによるバランス制御などのサポートがうまく働かないだけだ。

その事を知った時にすぐに俺はシミュレーターで何度も条件外での変形を試していた。

今回、実戦で初めて試したのだが、以外にも空中戦では有効だと証明できたのだ。

あわてて戦闘機の状態に戻したので現在位置がわからなくなってしまっていた。

おまけに上下すらあやふやだったのだが、一瞬だけ計器に目を移し感覚を正常にする。

その一瞬が命取りだったようで、またもや敵機に後ろを取られることになってしまった。

「くそ、最新鋭機があんな骨董品に～！！」

エアブレーキを開放し、オーバーシュートを誘うが、敵も一瞬後に減速して何とかオーバーシュートを防いだ。

しかし、お互いの距離が異様に近い。

すぐさま変形のレバーを引き、アーマーの状態へ再び変形。

この形態になったら完全に速度はゼロだ。

いくら減速したと言っても敵機は俺を追い抜く事になる。

右腕ごとガトリングガンが目標を指す。

自動照準装置によるロックが完了し、すぐさま引き金を引いた。

わずか1秒だけ。

戦闘機の装甲にはもったいないサイズの弾丸がMigに次々と突き刺さる。

このMigのパイロットは脱出どころか祈る暇も無い時間で絶命した。

多分骨すら残らないだろう。

何せ本来は対アーマー用の55mmの砲弾だ。

再度変形レーバーを操作し、また戦闘機状態へ戻す。

空中での変形と空中静止はかなり集中力を必要とするから、一刻も早く戦闘機の状態へ戻さないと墜落してしまう。

『メイデー！メイデー！後ろに付かれた！』

ノース3の上嶋だ。後ろにMigが張り付いて逃げ回っている。

『ノース3！変形してかわせ！』

ノース2の山本が上嶋に向かって叫んでいるが...

シミュレータで空中での変形、そして空中静止をマスターしたのは俺とその山本だけだ。

上嶋がこの局面で変形してくれるだろうか？

もちろん、俺だって仲間を見捨てるつもりはさらさら無い。

慌てて上嶋の後を追いかけている所だ。間に合えばいいが...

『うわあ～！ヒット！ヒットした！』

20mmがわずかにキャノピーをかすただけだが、パニックになっている奴にはそれだけで撃墜されてしまうと思込んでしまう。

『慌てるな！かすただけだ！落ち着け！』

おれは無線に叫び、どうにか落ち着かせようとするが、駄目だ。

上嶋機の飛び方はもうむちゃくちゃ。

Migが少し距離を置く。

まずい、ミサイルに切り替える気だ。

しかし、その減速がノース2の山本機を接近させる機会となった。

ノース2が後ろに張り付く寸前、敵はミサイルを放ってしまった。

その時！俺のコックピット内にもアラームが鳴る。ミサイル警報？

しまった！まだ1機残っていたか？

戦場内の残敵の確認を怠るなんて...初陣だからしょうがない。なんて言い訳は戦場ではご法度。

レーダーを一瞬だけ確認。接近してくるミサイルは、1・2・3・4...！？6発？ばかな！一度に6発ものロックが可能だと？

その全てが俺に向かって来ている。恐らくさっきのミサイル迎撃の様子を見ていたのだろう。

6発も放てば迎撃は不可能だと判断したに違いない。

それにしても6発ものミサイルを発射出来るなんて、F-202、いやこのヴァルシュナでさえ無理だ。

『山本！上嶋の事頼んだぞ！』

俺はミサイルをかわす事に専念する。

右に急旋回と同時にフレアを放出。

旋回時のロールを100度の角度にもっていき操縦桿を手前に引く。このタイミングでもフレアを放出。

2発はフレアに当たり爆発。残り4発。

水面ぎりぎりまで降下し殆ど0高度で引き起こすとさらに3発のミサイルが水面へ突っ込んだ。

残り1発！引き起こし動作の直後、アフターバーナーを吹かしていたのですでに速度は音速を突破した。

変形はもう無理。

ミサイルは上昇時に一瞬だけ速度を落としたので少し距離が離れた。

再度フレアを出し、左へ急旋回。

最後のミサイルは何とかフレアに当たってくれて近距離での爆発がおきる。

...どうにかミサイルを全てかわせたようだ。

「そうだ、上嶋は？」

無線で呼びかけてみる。

『ノース3！応答しろ！ノース3！』

暫くの空電ノイズの後応答が帰ってきた。

『こちらノース3、敵ミサイルが右エンジンにヒットしたが、何とか飛べる。これより基地へ帰投する。』

『ノース3、許可する。...ノース2！状況報告、残りの敵は何機だ？』

『こちらノース2、ノース3に張り付いていた敵は私が撃墜しました。しかし、ミサイルは残念ながらノース3の右後方で爆発。信管の誤作動かと思われます。運が良かった。』

ミサイルは機体に接近中に爆発したようだ。

『それと、残敵は現在ゼロ。救援部隊が間に合いました。』

あれ？と思い、レーダーを確認、味方機を表す光点が3つレンジ内で光っている。

『あ～こちらイレースリーダー。隆一、ミサイルをかわすのに必死で俺らが到着したのに気づかなかったな？』

『おせーよ！もう少しで俺も上嶋も撃墜されるところだったんだぞ？』

『最新鋭機に乗ってあんな骨董品に撃墜されかけた？恥ずかしい奴だな？』

ほっとけと心の中で悪態をつく。

ミサイルをかわして安心した所に敵が再度攻撃をかけて来なかったのは彼等のおかげであるから文句は言えない。

『とは言え、初陣で4機撃墜か？お前が2機、山本が2機。とりあえず誉めておくぞ？』

このF-202のパイロットは俺たちヴァルシュナのパイロットの空戦の教官でもある。

基地に配属されて、今日ヴァルシュナが配備するまではF-202を使って空戦訓練をしてくれた。

『1機損害が出たがな...、とりあえず敵機の出現場所を探しておいた方がいいかな？』

『お前達が戦闘中、既に衛星で潜水空母の位置を掴んでいた。そろそろP3C改が現場に到着する頃だな。俺たちはこのまま彼等の護衛任務に入る。お前達は帰還しろ。』

『ノース1了解。木更津コントロール、状況クリア、RTB』

## 第2話：青い空と白い雲

---

俺は空を見上げた。

相も変わらず、白い雲と青い空が視界を満たしてる。

この雲と空は俺が童（ガキ）の頃から変わらない...

俺は川岸に立っている。

かなり川幅があるこの川、向こう岸には敵の集団が陣を構えている。

今、この国「球陽（ティダ）」は3つに別れお互い領地争いをしている。

一つは「泰久王（たいくうおう）」が治める領土「北山」（ほくざん）今川岸の向こうに陣取っている連中の領地の事だ。

一つは「寧王（ねいおう）」が治める領土「中山」（中山）つまり、俺、「儀間清瀧」（ギマセイリュウ）の住んでいる領地

一つは「敬王（けいおう）」が治める領土「南山」（なんざん）北山とは中山を間にして離れており、現在は北山と中山の争いを静観。

中山は平地が多く、農業を中心として生活している。

南山ほどではないが、漁業もそれなりに盛んで民は結構豊かな暮らしをしている。

対して北山は山が多く平地が少ない。人が住めない訳では無いが、農地として不向き。その上、海岸は崖だらけで漁を行う為の港がなかなか作れないので食料が慢性的に不足気味だ。

その為、北山はこの中山の領地を欲しがっている。

北山から発掘されるクワンティーオは結構な数があり、そのせいか軍事力がティダの三国の中では一番だ。

対するこの中山は産業の中心である農業に従事している人から奪う訳にいかないなので、兵士は基本的には志願制だ。北山の徴兵制とはちがうので数に差が出ている。

残念ながら、この中山は少しずつだが領土を奪われ、今俺が立っているこの場所が現在の境界線だ。

この土地から少し後方に大きめの町があり、ここを突破されると当然その町が危ない。しかも、中山としては数少ない工業主体の町だ。

武器の生産が落ちてしまう。

俺の周りは甲冑を着込んで、手には槍や弓矢。そして最新兵器の「銃」を構えている者がざっと5000人くらい。

彼らを「銃士」と呼ぶ。

最新の銃はこの数年、とある事情によって開発、製造された。

現代の戦（いくさ）はこの銃の運用が勝利に繋がる。

この銃と言うのは3尺から4尺くらいの長さの鉄の筒に火薬を仕込み、火薬の爆発力を使用してドングリの形に似た鉄の塊を撃ち出し敵兵を殺傷するものだ。

欠点は連射性の悪さだ。

筒の中に火薬を仕込み、その上に鉄の塊を入れる。

（この鉄の塊を弾丸と俺たちは呼んでいる）

火打ち石を仕込んだ撃鉄を引き起こし引き金を引くとバネの力で倒れた火打ち石が火花を出し、火薬に引火し、弾丸を発射。

このように弓矢に比べると圧倒的に連射性が悪く、尚かつ湿度が高くなったり、雨が降ると火打ち石が火花を散らさないため使用できない。

そして、後方には100名程の女性もいる。

彼女らは神女と祝々（ノロノロ）

神女は祈りで神の力を身に付け物理的ではない攻撃を敵に与える。

祝々は祈りの力で傷ついた味方を癒したり、空間を捻じ曲げ遠距離の地へ近道をつくってしまったたり、大質量のモノを瞬時に移動したりする。

この世界では女性しかなれない、術の力だ。

その、攻撃用の術は射程は短いが一定の範囲を炎や雷で攻撃する。

射程の短さや祈りの時間が長いのが欠点。

射程が短いせいで、活躍するのは本陣が攻撃受けてから。

祝祝は後方で傷兵の手当をする。

手当とは言っても傷口を塞ぐとか体内に入った弾丸を取り除く事くらいしかできない。

憔悴しきっている兵を元気にすることまではさすがに不可能だ。

手足を失った場合、切断された手足があれば元通りにする事は可能だが、手足そのものを生やす事までは出来ない。

祝祝でも実力の高い者になると、何も無い空間に〔道〕を作り短時間で遠距離の移動を可能にしたり、物質を転送したりすることが可能になる。

その代わり、祝祝の知っている場所じゃないとだめだが。

このように実際には神女より祝祝の方がいろいろと活躍してくれる。

クワンティーオの事だが...

それは我々の時代よりも大昔、一説にはアマミクの神の時代とも言われている超兵器の事。

大昔、神に戦いを挑んだ戦士達が使用していたと言われている

詳しく説明すると、外見は入道をおぼろげな大男。身の丈33尺くらい。

素材が解らない甲冑を身に纏う、これは神女の攻撃魔法も通用しない。

当然だが、この巨人は俺たちティダの人間が作り出したものではない。  
数百年前に、北山の「フェンチチ山」から発見、出土されたのが最初。  
偶然にもその発掘に居合わせた者がチャスとして選ばれ、その巨人がどんな物であるかがすぐに判明した。  
殺戮破壊兵器...

当時、軍事国家へと変貌しはじめたばかりの北山は、その巨人を「クワンティーオ」と名付け、ティダ中にその兵器としての実力を公表した。  
それも、中山への侵攻と言う形で。

4騎のクワンティーオを伴った北山の軍は、ものの半年で中山の領土の半分近くを手中に収めた。

そのくらいクワンティーオは強力なのだ。

右腕に仕込まれた大砲。

筒の直径はだいたい半尺くらい。

先に話した銃の親玉みたいにすごくでかい。

この大砲から放たれる砲弾は防衛の砦を簡単に破壊する。

砲弾の素材をわざと質の悪いもので作ると、砲身からでた直後にばらばらになり、その破片が歩兵部隊へ広範囲に打撃を与える。

それ以外にも地上付近で爆発し、中に仕込まれた鉄の玉を周囲にまき散らす兵器や広範囲を火の海にする爆弾もある。

そして自身は通常の弓は当然、神女の攻撃でさえ通用しない。

だが、領土の半分も奪われ、中山の首都近くまで北山が攻めてくる頃には、中山でもクワンティーオが発掘され運用を開始した。

発掘したてのクワンティーオは剣はあったが、対人用の兵器は無かった。

どうやら、北山の連中が後から付けた兵器のようだ。

この兵器に関しては後に鹵獲した敵のクワンティーオを基に中山でも南山の進んだ技術力の協力を得て開発し、取り付ける事ができた。

クワンティーオ同士の戦いとなると、質は北山よりも高く、2騎のクワンティーオで10騎まで増えていた北山のクワンティーオを押し返し、領土を8割までに戻した。

それから数十年は一旦休戦となっていたが、この数年で北山はクワンティーオの数を増やし、再度侵攻を開始した。

で、このクワンティーオの事だが。

こいつは自分の意志で動くことができず、中に人が入って動かす必要がある。



胸の部分に人が入る空間があり、そこに操縦者は入りこの巨人を思うまま動かす。  
誰でも動かせるものではなく、適正のある者しか操縦はできない。  
適正のある者は巨人の操作方法は勝手に頭に入るらしく、適正の無い者は操縦室に入っても何も起こらないようだ。  
このクワンティーオ1体で1000人規模の部隊はかるく殲滅できる。  
しかし、クワンティーオはクワンティーオでなければ倒せない。  
なんせ、先に言ったが銃や大砲は言うに及ばず、神女の攻撃用の術でさえクワンティーオには通用しない。  
だが、欠点はある。  
稼動時間が極端に短く。クワンティーオ同士で戦闘すると終了後には敵の歩兵、騎兵を掃討する力が残らない。  
一旦行動不能になってしまうと動けるまで丸々1日待たねばならず、完全にウドの大木的に巨大な障害物としかならない。  
なので、今ではうかつにクワンティーオを出すことは無く、下手すると戦場に投入するきっかけを失って、そのまま戦闘終了なんて間抜けな話も冗談では無く本当にあるのだ。  
下手に出撃させると、敵のクワンティーオの迎撃に遭い、よくて引き分け。  
最悪こちらよりも多くのクワンティーオを敵が準備していればこちらが全滅になる場合がある。

それで、今俺が置かれている状況なんだが...  
俺は甲冑も着なければ武器も手にしていない。  
今話をした、クワンティーオの操縦者（我々は適格者【ヂャス】と呼ぶ）だからだ。  
しかも、王直属なのでこの部隊には俺に命令できる権限を持っている奴は居ない。  
本来、ここの防衛の任を受けている部隊にもクワンティーオは何騎かは配備されているはずなんだが、今は俺だけだ。  
先にも言ったように、クワンティーオは一度行動不能になるまで動かすと、まる一日は動けなくなってしまう。  
ここの砦の司令官が計算をミスったんだな。  
今、この時間に動かすことが出来るクワンティーオは1騎もない。  
司令官自身もヂャスであり、クワンティーオの事は熟知しているはずなんだが...

この実戦部隊の一番えらい奴...つまり千戸長と言う役職の人間だが、そいつが俺を睨んでいる。  
何せ、命令出来ない人間がうろちょろしているんだから、邪魔なんだろうな。  
本来なら城の守りを担当している近衛軍の俺がここに居る事もありえないんだが。ちなみに、千戸長とは「千の兵を統括」と言う意味なので、律儀に千人単位で部隊を束ねている訳ではない。

砦に設けている司令部に居る司令官を頂点として寨官（たいかん）が補佐を勤め、現場では千戸長が指揮をとる。

そして、百人単位の兵を束ねる百戸長が数名。

さらにその下に小部隊長が居るわけだ。小部隊長には正式な名称は存在しない。

銃を装備している部隊はこのくくりとは別に「銃鬼」と言う長が束ねる。

神女と祝祝は「聞得大君」という長のみ。

その下には階級は無い。

クワンティーオのチャスは基本的に位を持たない。

しかし、王直属の近衛軍だけは別だ。

大きく別れて2つ。

ひとつはもっとも王に近い立場の7人とそれ以外。

この7人は王以外の命令は受けないが王以外の者、長史以外に命令をする権限がある。

近衛の7人には各自〔色〕を割り当てている。

俺は〔黒色〕で近衛の7人を統括する立場だ。

クワンティーオの操縦だけでなく、祭典時等の公での身辺警護もする。

また、黒のリーダー以外は6箇所ある防衛用砦の司令官も兼任し、大抵はその砦に居る。

7人の色は各々が着ている式典用の服と戦闘服の一部に使用され、また羽織っているマントにも染められている。

ちなみに、近衛以外のチャスは全て灰色と決まっている。

さて戦場の様子だが、敵味方にらみ合いが緊張がピーク状態。

お互い、示し合わせた訳ではないが最前衛の銃士たちの銃撃から戦いは始まった。

銃は一発撃ったらすぐ後方へ下がり、次弾を装填。再び前衛に戻り射撃を開始する。

間髪なく銃撃を加えるため銃士は2列横隊で交互にソレを繰り返す。

当然敵もまげずに銃撃をこちらに浴びせる。

人工的に遮蔽物を作り上げているが、その間を通る流れ弾などが他の兵にあたり絶命する。

射撃を行う為遮蔽物から顔を出したところで狙撃されたりすると銃撃がだんだん減ってしまう。

頃合いをみはかった時、この銃撃戦の合間に左右に展開していた味方の歩兵が突撃を開始した。

槍を前に構え、敵の集団を押しつぶす勢いで突進。

慌てた敵の銃士が左右に狙いを変え射撃を開始するが単発の銃では槍兵の勢いを殺すまでには至らない。

味方の銃士は槍兵に弾が当たるのを恐れ射撃は中止している。

敵の歩兵が槍兵の迎撃にあっているが、流れは完全にこちらにある。

この戦は既に勝敗が決定したようなものだ...クワンティーオさえ出てこなければ。

だが、轟音が大地を揺さぶる。

何か大型の動物か何かが大地を踏みしめるような感じだ

「クワンティーオ！」

おれの近くにいた騎兵が大声を上げる。

「やっぱり、来たか…」

同時に俺は俺のクワンティーオに向かって走る。

偽装した木の枝を掻き分け操縦室まであがり、入り口の開閉ノブを回す。

空気の漏れる音と共にハッチが開き、操縦室への入り口が開いた。。

中に入り込み左右の操縦桿に手を置く。その瞬間。

暗かった室内に明かりがともり、クワンティーオの目から入る外の映像が目の前に現れ、機動完了の合図である前面にあるランプがすべて点灯した。

両足のペダルをゆっくり踏み込み左右の操縦桿を前に押し出す。

巨人はゆっくりと立ち上がり始める。

俺のクワンティーオ、「クジヌール」は全ての兵士の目に映る。

敵のクワンティーオも1騎。北山でよく発掘される「ウティン」だ。

北山の主力であり、数は中山のクワンティーオ「アーマム」より多く集団戦でよく攻めてくる。

装甲がやや厚めの無骨な外観が特徴だ。

ウティンの数は多いが、機動性、パワーなどはアーマムより落ちる。

おれのクワンティーオ「クジヌール」は近衛軍の中でもトップクラスのパワーを持ち、ウティン程度が相手なら2～3体相手にしても苦ではない。

それでいて、軽量ならではの機動性で敵の剣と刃をあわす事も無く急所を付き破壊する事が可能だ。

だが、敵も俺のクジヌールを見ただけで力の差は解るはずだがそれに構わず剣を抜く。どうやらやる気はあるようだ。

足下を見るとクワンティーオ戦の為に両軍とも後方へ撤退していて、暴れる空間が出来ている。

ソレを確認し、剣を抜くと同時に敵に向かって走り始める。

走る勢いを加えた剣は軽量のクジヌールでもウティンの装甲を突き破る破壊力がある。

一撃で敵を葬れば、敵の歩兵などをこのまま攻撃出来る余裕があるはず。

だが、川の中に入った瞬間、走る勢いを殺された。

敵のクワンティーオの左右後ろより砲撃が加えられた！

「クワンティーオの伏兵？」

同じウティンが森の中より姿を現す。

「しまった！単純な罠だった！」

ウティン1機と侮った俺のミス！集団戦が得意な敵が一体だけなんてあるはずが無かったんだ。クワンティーオの砲撃は直撃を受けても致命傷にはならないが、そう何発も食らったらどこかに変調をきたす。

当然、戦闘中はそれが命取りになる事だって多々ある。

大砲は両腕で各1発ずつ...

3体いるから、6発...6発だけならなんとかなる。

背中に収納した盾を引き出し、砲撃を防ぐが盾は今の時代の人間が作った物。クワンティーオの装甲ほど保ちはしない。

一旦川岸まで引き、敵の弾切れを待つ事にする。

そうはうまくいかないようだ、こっちが後退すると同時に敵の中央の奴が同じタイミングで突っ込んできた。

だが、それはこっちの戦術に嵌ったことを意味する。

クワンティーオはどっちみち、砲撃では撃破出来ないことはさっき話した通り。

撃破するにはクワンティーオに装備されている剣で無くてはならない。

何故なら、砲撃の破壊エネルギーよりクワンティーオ自身が振り下ろす剣の破壊力が圧倒的なのだ。

もちろん、剣自身が持つ「切れ味」と「重量」も加わる。

クワンティーオの表面装甲は破損してもしばらく放置すると復元する性質がある。

だが、内部の機構まで破壊されるとかなりの時間が必要とされる。破壊具合にもよるが、およそ半年から数年ってとこだ。

ただし、胴体や首を両断されると復元はさすがに不可能で、そういう状態で破壊する事によってはじめて「撃破」と言う。

ちなみに腕や足程度の破損は城の整備兵が直してくれる。

さて、こっちの後退によって突進してきた敵だが、クワンティーオがよくやる盾を前にしながらの突進では無く、盾を腕に装着して剣を両手で構えた状態で接近してきた。

味方のクワンティーオに当たらないよう砲撃が止んだ瞬間、俺はすぐさま動いた。

盾を突進してくる奴に投げつけ、こっちも突進する。

だが、突進してきた敵に構わず、そのまま通り抜け大きく跳躍する。

突進していった味方と剣を交えると思っていたら、森に潜んでいた別の敵は砲撃を再開する余裕を失っていた。

俺の、クジヌールは素早い跳躍を得意とする。跳んだと思ったらもう目の前に現れるのだから、敵は砲撃の暇が無くなるだろう。

着地と同時に剣を振り下ろし左肩から袈裟切り。

そのまま未だ現状を理解出来ないでいる反対側の伏兵に向かい大きく踏み込む。

踏み込みの勢いとクジヌールのパワーをもって一気に首を刎る。

見た目は細い首だが、実は他の装甲より頑丈でしかも範囲が狭い為、意外と狙いにくい。

かなりの抵抗を感じた次の瞬間、敵の首と胴体は完全に離れた。

その時！

俺と敵の間にもものすごい光が現れた。

「空間移動！？」

クワンティーオは〔祝祝〕の術の力を借りて、空間を移動することが出来る。

敵の援軍か伏兵かが俺との間に空間移動してきたのだろう。

この移動の欠点は移動後の戦闘時間が極端に短くなること。

また、祝祝の能力に依存する事になり、祝祝が転送先の状況を把握していなければ敵のど真ん中に転送されてしまったり、足場が悪いところへ転送されてしまって、出現したと同時にバランスを崩して倒れてたり、崖に落ちたりしてしまう。

だから、転送を行う時は地形がはっきりしている自領地内か、前もって間諜等を使って調査する必要がある。

こんなに何度も敵のクワンティーオが転送されてくると言う事はこっちの地形が完全に敵に把握されてしまっていると言う事か、すぐ近くに〔転送〕が可能な祝祝がいるのだろう。

光の中から新たに2つのクワンティーオが出現したとき、さらに俺の両脇にも光が現れた！

「まずい！」

こんなに正確に転送するなんて、敵の祝祝の能力は相当高い。

その場から急いで離れようとしたが、数発の砲撃を受けて立ち止まってしまった。

光から完全にクワンティーオが現れると俺のクジヌールの両腕を押さえられてしまった。

何故にこうも正確な位置に転送して来れるんだ？

動けなくなった俺めがけて敵のクワンティーオは突進してくる。

最初に俺めがけて来た奴だ。今度こそ討ち取るつもりだろう。

2重にも敵の罠にかかってしまうとは...

その時、俺の目の前にまた光が現れた。

だが、今度の光は見たことの無い光だ。

光にも色がある。通常の間移動の出現時に現れる光を薄い緑として、今日の前に出現した光は青だった。

今度の間移動者は光から現れるのではなく、飛び出して来た。

飛び出した物体はクワンティーオに似ているが少し違うようだ。

大きさは同じくらいだが見たことの無いシルエットをもっている。

クワンティーオと同じ巨人だが表面の材質感、体型が全く違う。

クワンティーオの中でも俺のクジヌールが軽量で小柄な体系だが、そいつはさらにスマートな体型をしており、殴っただけで軽く吹っ飛びそうだ。

そいつは、自分がこの場に来たことが理解出来てないようで、しばらくぼーっと突っ立て居る。北山の奴らはその乱入者を俺の味方と判断したのか、斬りかかっていく。ソイツは手にした大型の銃らしき物を敵に向けるとクウワンティーオの砲撃に近い咆吼をあげる。

それも連続してだ。

擬音にして表現すると『ダーン』ではない『ダー』と言う感じだ。

砲撃ではビクともしないクウワンティーオがその衝撃で仰向けに勢いよく倒れた。

さすがに、あれだけの砲撃を受けるとクウワンティーオですら耐えられないと言う事か。

クウワンティーオはその自重の為、一度倒れたら内部の構造が破壊され動くことが出来ない。

最悪、中のチャスも衝撃によって死んでしまう事もよくある。

なんせ、10mほどの高さから落ちるようなもんだ。

その光景に自分を含めた敵味方全てが呆然となる。

敵よりも早く我を取り戻すと、右にいたウティンの足を払い膝をつけさせ、右腕の自由を取り戻す。

そして、右腕の大砲を左にいたウティンの顔面に向け発射。

よろめいたところへ剣を一気に振り下ろす。

残る敵は2体。

一度の戦闘で3体以上のクウワンティーオとの戦闘は未経験だ。

なんせ、エネルギーが普通持たない。

案の定、俺のクジヌールは膝を付いた。

だが、謎の侵入者は残る2体の敵にも攻撃を加えていた。

あの、巨人サイズの銃を向け多分弾丸も大砲並に、いやそれ以上の大きさのはずだが、ソレを残る敵へ向けて轟音と共にばらまいていた。

その銃らしき物からは金属の筒がものすごい数と勢いで地面にばら撒かれている。

何なんだろ...その筒は...

しかし、さすがに装甲は破壊できならしい。

両足を広げて盾を前に出した状態で踏ん張っているウティンには効果が無いようだ。

奴もそれに気づいたらしく、銃撃は止んだ。しかし、その代わり何やら大きな銃らしき物を組み立てはじめている。

両足に取り付けられていた部品を外し、取り付け、最後に背中に背負っていた長めの筒を取り付けた。

作業が終わると同時に、まだ踏ん張っていた最後の敵に向ける。

「大砲？」

その筒から発せられる轟音と同時に、砲身を向けられた敵の胸に大きな穴が開いていた。

「?なんだ？」

正体不明のソイツは連射を行っている。

3回の連続した音の後、敵のクウワンティーオは装甲に小さな穴を4つほど空けられており、そのひとつが見事に操縦席を貫いていた。

何て威力だ。

大砲でクウワンティーオの装甲を破るなんて初めて見た。

ああ、そうか。こいつだ。

俺がこの場所に来ている本来の理由。

我が王から、この場で〔ニライ〕よりの客人を待てとの勅命を受けたのだが、こいつの事か。

### 第3話：緑と青の道

---

「こいつが、その新兵器だ。」

整備長の親父は目の前にあるとてつもない大きさのライフルを指して言った。

人間には大きすぎるが、アーマーが持つには丁度いい大きさだろう。

「こいつがですか？」

「ああ、一見したらアーマー用の大型ライフルだがな...」

整備長は手に持ってた分厚いマニュアルを渡しながらか喋ってる。

俺はくそ重いマニュアルを受け取った。

その表紙には〔RAILGUN〕とゴシック体のアルファベットで書かれている。

「レールガン？」

「ああ、レールガンだ。」

レールガンは電磁力で金属製の弾丸を秒速15Kmの超高速で打ち出す。

火薬式の火器とは桁違いの貫通力を生み出す。

「実用化してたんですか...」

「通常のアーマーでは使用できない。ヴァルシュナだから可能だ。」

「？ヴァルシュナだから？」

実は俺はレールガンの構造などは殆ど理解出来てない。

「ヴァルシュナのエンジンが発生させる発電力がレールガンに必要なんだ。」

レールガンの欠点はメガジュール級の電力を必要とするらしい。

ヴァルシュナのエンジンは半外燃機関。

「ヴァルシュナの半外燃機関のエンジンが生み出す膨大なエネルギーの余剰で生み出される電力はレールガンを使用するために必要な電力に十分足りる。」

アーマー用の発電にはとてつもない電力を生み出すが、戦闘機の推進装置としては推力が足りない。

まだまだ問題が多いエンジンなんだが。

「その代わりに、射撃中はエンジンをフル回転しないといけないけどな。」

レールガンの長所となると...

「後、弾丸自体が伝導体であれば、形成するだけで生産が可能だから、通常弾に比べたらコストも抑えられる。」

「あの...こいつを携帯したら、戦闘機へ戻せないんじゃ？」

「おお？よく気づいたな！」

馬鹿にされてるんだか...

「色々研究してはいるんだが、どうしてもこの大きさを空気抵抗の無い状態でアイツに収納させることが出来ないんだ。」

腰に手を当て大笑いしながらの言い訳。

「当面は3つに分解して機体にジョイントさせ使用時に組み立てるスタイルを取る。その為の専



用ハードポイントを特別にお前の機体だけ作っというた。」

「へ!？」

「両足の外側と、背中だ。」

もちろんだが、俺はそんな事は許可した覚えはない。

ヴァルシュナは機密の関係から一人のパイロットが専用の機体に搭乗する事になっている。だから、何か特別な整備等を行う時は搭乗者の許可が必要だ。

「...勝手に改造した事はとりあえず置いておこう...それでも変形後の飛行は無理では?翼下のハードポイントに接続できないのか？」

「アーマーの本質は地上戦だ、気にするな。」

「...」

「それにハードポイントの規格に合わないし、重すぎる。将来軽量化したら考えよう。」

もちろんこの親父はよく知ってるはずだ、ヴァルシュナはアーマーが飛行機に変形するのでは無く。飛行機がアーマーへ変形するのだと、言う事を。

本来の形を崩してまで核以外では地上最大の兵器を装備させようとしている。

確かに、対アーマー戦となると55mm弾のガトリングよりは撃破しやすいだろう。

なんせ、55mmでも100発ほどの弾丸を打ち込まないとアーマーの装甲は破壊出来ない。

まあ、ガトリングは1秒で80発も打ち出せるから、1~2秒当てればOKだ。

「ああ、そうだ!」

逃げかけた整備長の親父が振り向きながら大声を上げる。

「今晚からこのレールガン用の制御ソフトをインストールするから立ち会えよ!」

「!!ちょっと待ってください。俺、この後は非番なんですけど?」

「どうせ、デートの予定も無く自室で寝てるだけだろ?」

「く...」

痛いところをつかれた。

けど、別に彼女がほしい訳ではない。

女性と話すのが苦手なんだ...

女性に限らない。同性とも仕事関連の話以外はうざったい...

先日の初戦闘以来、戦闘の報告書作成や偉いさん達への口頭での報告。

そして、一番イヤだった同僚達からの武勇伝のせがみ。

最近、そういった事ばかりで精神的に参り始めていたんだ。

今夜、明日とゆっくり休む予定だったのに。

そう、うんざりしているところへ一人の女性が俺の背中を叩いた。

「おう!ご苦労さん!」

「ああ...」

実は苦手な女性の中でこいつが一番苦手なんだ。

名前は「大橋茂斗子(おおはしもとこ)」

同じヴァルシュナのパイロットで、別チーム、キャンパスの小隊長だ。

階級も俺と同じ中尉。

気安い性格で誰にでも軽く声をかける。

任務外だろうが任務中だろうが、相手の階級が低かろうが... (階級が高いのは対象外)

その性格からか、部下からは結構慕われている。

数少ない女性パイロットの一人なんだが、こいつを普通の女性として見てはいけない。

外見こそ、そこそこ見られる容姿をしている。

髪は肩と腰の間くらいの長さで揃えており、薄い茶色に染めている。

身長は150は無いと思うほど小柄だ。

3サイズは本人の名誉とプライバシーの為に控えておこう。

俺も、そんなスペックには興味が無い。



「で、今日は聞かせてくれるんでしょ？」

「なにを？」

「決まってるじゃない、八丈島沖での武勇伝よ。」

やっぱりだ...

「俺は忙しいんだよ。」

「うそ！この後非番なんじゃないの？」

「なんで知ってるんだよ。」

何故かは知らないがこの女、俺のスケジュールを把握している。

俺のスケジュールは同じチームか中隊長しか知らないはずなんだが...

そんな疑問を彼女は種明かししてくれた。

「あんたのチームの山本少尉に聞いたの。彼もこの後非番らしいしね。」

山本って言う奴はうちのノースチームでNo.2のコールを持っている奴だ。

こいつもあの戦闘後各方面で武勇伝をせがまれ、俺にグチを言っていた。

俺より社交性のある山本は律儀に連日夜中まで付き合わされたらしい。

「新兵器の制御ソフトのインストールがあるんだよ。」

「あ、それってレールガンの事？」

「ああ。この後俺の機体にインストールするんだってさ。」

「でも、それって夜遅くからでしょ？」

なんでそんな事まで知ってるんだ？

基地内で一番の情報通は伊達じゃない。

「わかったよ。この後飯にしたいんだ。」

「じゃ、おごるわよ？A定食でいい？」

「ほう？奮発したな？食堂で一番高いメニューじゃないか。」

「もしかしたら、私の初陣に役に立つ情報が聞けるかもしれないんだもん。」

「と、まあこういう手順で組み立てるんだ。わかったか？」

整備長の親父がレールガンの組み立て手順を説明する。

機体に搭載されているコンピュータをレールガン組み立て用のモードに切り替え、シミュレーションする。

前面のモニタに組み立てフェーズが表示され完了の文字がでる。

ここまでの所用時間約5秒。

アーマーモードになってるヴァルシュナから降り、一息つくため喫煙所へと向かう。

整備用のつなぎの胸ポケットからタバコを取り出し、口に咥えたところで喫煙所の扉を開いた。

よく仲間から「中に入ってからタバコは出せよ」なんて言われる。

オイルライターの火をつけタバコに火を移す。

一息吸った所でまたやってきた。あの女が...

「ねえどう？レールガンは？」

整備用の作業服の状態で彼女は喫煙所へ入ってきた。

彼女は喫煙者じゃないが、タバコの臭いが充満している喫煙所への出入りは全然気にしていない。

普通愛煙者以外はこの部屋へは入りたがらないものだが...

「どう、たって試射した訳じゃないぜ？アプリを使っただけのシミュレーションしただけだ。お前も近くで自分の機体の整備してたみたいだからわかるだろ？」

「シミュレーションでもだいたいの感触はわかるでしょ？」

「わかんねーよ。それより髪の毛にタバコの匂い移るぞ？」

そこで突然アラームが鳴り響く

「！！」

『アンノウン多数接近！八丈島沖より当基地へ急速接近中！』

パイロットスーツへ着替えるためハンガーの隣にある更衣室へ走る。

もちろん彼女も一緒だ。

『データに照合されない機体のみ約20機、敵の新型戦闘機と思われる。』

作業服を脱ぎアンダーウエアの上からパイロットスーツを着る。

戦闘機パイロット用のスーツだ。対G効果がある。

普通のアーマードライバーは戦車乗りと同じスーツとヘルメットを使用するが、基が戦闘機であるヴァルシュナは当然パイロットスーツを着る。

今のパイロットスーツは宇宙服並に機密性が高く、その為着るのに時間がかかるのが欠点。

そして俺の愛機へ向かい走り始めるが、そこでハタと気づいた。

「しまった、レールガン装備したままだ！」

レールガン装備のため、アーマーモードで整備用ハンガーに置きっぱなし。

敵は戦闘機。大急ぎでレールガンを取り外し、戦闘機へモード変更しなければならない。

足を格納ハンガーからさっきまで居た整備用ハンガーへ向ける。

その時、スクランブル待機中だったドッグチームが緊急発進するアナウンスと共にアフターバーナー全開のエンジン音が基地を揺らした。

ドッグチームは通常戦闘機。ヴァルシュナではない。

日本軍の主力戦闘機であるボーイング社のF-202だ。

整備ハンガーへ戻ると俺のヴァルシュナはまだアーマーモードのままだった。

「ちょっと整備長！なんでまだアーマーなんです？あ？レールガンもそのままじゃないですか？」

両足と背中にジョイントされたレールガンのパーツがそのままの状態ではエンジンが始動開始されている。

「あ？司令室からの報告だと大型機の存在も確認されているんだ。多分、アーマーを積んでいるぞ？」

「この基地にも通常のアーマー『武蔵』が配備されているでしょう！それに大型機は基地に来るまでに戦闘機で落とします！」

「...わかったよ。せっかく基地指令を丸め込んで実弾まで込めたのに...」

もしかしたらこの親父、レールガンを実戦で使ってみただけでこんな無茶な事を？

クレーンを操作開始していたが、俺は構わず操縦席へ入りレールガンを強制パーズする為の動作をコンピュータに実行させた。

ものすごい音がしてレールガンの各パーツは床に落ちる。

と、同時に整備長の怒鳴り声が聞こえる。

「ばかやろー！これでも精密機械なんだ、大切に扱え！」

今はそんな事を言っている暇はない。

今まで、散発的に首都圏へ向かってくる正体不明の航空機は多数あったが、今度のはそんなものじゃない。

換装用のクレーンがヴァルシュナを捕らえ、空中に浮かす。

そのタイミングでアーマーから戦闘機へモード変更。

戦闘機の状態では飛行時にアーマーへ変形する事は出来るが、その逆が出来ない。

戦闘機へ戻すには整備ハンガー内でクレーンを使用しなければならない。

もしくは、専用のクレーン車を使う。

ランディングギアを出し、ハンガーの床へ接地させ。管制塔へ離陸許可を出す

『木更津コントロール！リクエストタキシー！』

『ノース1、タキシートゥランウェイ　バイアブラボーワントゥ』  
「ノース1了解！...おーい整備員！エンジン吹かすから注意しろ」  
ヴァルシュナの後方に居た整備員が大慌てで逃げてゆく。  
B12ランプを經由して滑走路へと向かう。

俺が離陸した頃にはわりと近くで戦闘が始まっていた。

編隊を組む余裕は無い。

識別コードに反応しない敵を片っ端からやっつけていくしかない。

司令室からの連絡によると八丈島の沖に潜水空母の艦隊が居たらしい。

さっそくエネミー反応があった。

「まずはこいつから...？あ！ミサイルが無い！」

整備中だったから当然ミサイルは装備していない。

機首の20mmヴァルカンとアーマー時の55mmガトリングしかない。

それも残弾数百発ずつ...どちらも一連射したら終わりだ。

とりあえず目の前の敵を片づけることにする。

機体を左にロールさせ90°になったところで操縦桿を引く。

急速に左旋回が始まり、微調整のためフットバーを足で踏み込みラダーを動かす。

さらに左にロールさせ天地が逆になったところで操縦桿を引いて降下を開始。

高度がある程度下がったとこで再度操縦桿を引いて機体を水平に戻す。

この時点で敵は自分の右側に右旋回を行いながら遠ざかろうとしている。

すぐさま自分も右へ旋回し、後を追う。

自分が追いかけている事を察知したのだろう。

敵は急速に上昇を始め目くらましのつもりか誤動作かしらないがフレアを放出した。

俺も上昇を始め、敵を追う。

自動照準装置が敵を捕らえるために小刻みに動く。

上昇から一転、急降下。急降下からさらに右旋回。

自動照準装置は敵の未来位置を予測しシンボルマークでそれを伝える。

操縦桿についている武器セレクターをヴァルカンに切り替えると照準装置もヴァルカン用に切り替わる。

弾道の予測用ラインが敵と重なった瞬間、機首に装備されている20mmヴァルカンを発射させる。

左に放物線を描きながら20mmの弾丸は敵機に吸い込まれ多数の穴を開けると敵機は火を噴き墜落した。

操縦席にも被弾したらしく脱出装置は作動しなかった。

この時点で機首の20mmヴァルカンは残弾20発...もう役に立たない。

「ちっ」

と舌打ちした直後ロックオン警報が鳴る。

どっかから自分に向かってミサイルを発射したようだ。

フレアを放出し、反転降下。逆ループを描き機体が地面と水平になったところで俺にミサイルを撃った敵機を視認した。

ミサイル警報は消えている。フレアでだませたらしい。

敵機は自分の進行方向とは逆に向かって飛んでいる。

旋回して後を追うには遅いタイミング。

スロットルレバーの上に付いている変形用のレバーに手を移し、躊躇せず一気に手前に引く。

空中で戦闘機の状態からアーマーへ。

急激な減速はシートベルトを凶器に変える。

肉にシートベルトが食い込み体中に激痛が走る。

しかし、その痛さに我慢しながらガトリングの照準をヘルメット連動に切り替え敵機を『見る』バイザーに投影されたクロスマークを敵機にあわせる為に首を動かす。

首の動きと連動し、アーマーの右腕ガトリングも敵に向かい動く。

操縦桿の引き金を引くと55mmと言う大砲並の弾丸が敵機にダメージを与える。

ダメージなんてもんじゃない。

あっという間に戦闘機は粉々にになり大爆発。

敵のパイロットは祈る暇もなく消滅しただろう。

「ノース1より木更津ベース。弾薬補給の為一時帰投する。」

『木更津ベース、了解』

無線にほかの同僚の帰投許可願いが入り込んできた。

『こちらキャンパス1。ヴァルカンがジャムった。基地へ帰投して修理したい。許可を願う。』

キャンパス1？茂斗子か？同じタイミングで帰投...なんかイヤな予感がする...

基地のハンガーで弾薬の補給を行ってる間に休息室里で俺も水分の補給を行う。

その側で茂斗子がさっきからしゃべりまくってる。

「っで、あなたと山本少尉が言ったように空中でモードチェンジしたのよ。あれって、空中戦にも有効なのね？」

「ああ...」

「でも、空中でバランスを取るのって大変じゃない！よくあんな事思いついたわよね？」

「いきなり思い付いた訳じゃない。大分まえからシミュレートして考えていたんだ。」

「私のチームのみんなにも伝授したいから今度訓練に付き合ってくれない？」

「生きていたらな...」

俺のイヤな予感は当たっていた...

茂斗子は休息の間中ずーっと喋っていた。

俺は相づちをうつだけでもめんどくさい。

『ノース1の弾薬補給完了』

アナウンスが休息室里に響いた。

悪魔から脱出する為の天使の声だ。

じゃ、と短く挨拶して俺は休息室から逃げるように出る。

茂斗子はまだ、何か言いたそうだったが、構ってられない。

ドアのノブに手をかけると、茂斗子が後ろから声をかけてきた。

そのまま休息室のドアを開けると、ハンガー内にあるF-202やらヴァルシュナやらの騒音が飛び込んで茂斗子の台詞をかき消す。

聞き返すことはせずに、ハンガーに入った瞬間司令室からアナウンスが流れた。

『敵大型機、西方より多数接近！先ほどの敵は囷である。さらに東京湾入り口に大型潜水空母確認』

コンプレッサーを繋いで始動開始するがなかなかエンジンは始動しない。

『敵機、最終防衛網突破』

『敵大型機よりアーマーが分離！基地西方に着地確認！』

何度か始動に挑戦した頃、

「コンタクト！」

エンジンがようやく始動した。

アナウンスを聞く限り、大型機はアーマーの輸送機らしい。

1機に対してアーマー1機を運ぶ。

短時間でここまで到達したと言うことは、強襲を目的としたものらしい。

基地のすぐ側まで来たって事は戦闘機の状態では迎撃は無理だ。

離陸中に攻撃されてしまう。

「整備班！大急ぎでアーマー換装だ！用意しろ！」

「いい機会だ、ついでにあいつも取り付けてやれ！」

まさか、レールガンの事か？

すると、俺の後ろからホークリフト2台がかりで何かを運んできた。

案の定レールガンを持ってきやがった。

「取り付けてる暇はない！すぐにでも出るぞ！」

「大丈夫だ。基地防衛用のアーマーが時間を稼いでくれる」

整備班は俺の言うことより整備長の言うことを聞く。

階級はこっちが上だって言うのに...

基地の側で爆発が相次いだ。

かなり接近している。

整備員は爆発の振動や音に怯むことなく作業を続ける。

レールガン取り付け作業の間に、俺の後ろでは茂斗子の機体がハンガー内でのアーマーモードに換装し終わり出撃するところだ。

『片寄中尉！私が時間を稼ぎます。レールガンを装備し終わってから戦線に来てください』

と、外部スピーカーで俺に言ってきた。

せめてヴォリュームをもうちょっと落として欲しい。

普段のあいつの大声が100万倍に拡声されたようだ。

あいつはハンガーの外に出ると同時にガトリングを撃ちまくっていた。

どうやら敵はすぐ側まで来ているらしい。

その事を証明するように司令室からアナウンスが響く

『敵基地内に潜入！非戦闘員はシェルターへ避難してください。』

まずい。レールガンは後、砲身を背中にジョイントする作業が残っている。

「整備！もういい！避難しろ！レールガンなんて今回はパスだ！」

整備員をこれ以上危険な目に遭わせたくない。

大急ぎでヴァルシュナの操縦席へ入り整備用の足場をヴァルシュナの手でどこかそうとすると足元で整備班長が

「砲身の取り付けが終了した！出ていいぞ！」

と大声を張り上げている。

俺がいい、と言ったのに作業を続けていたのか？

整備台が大急ぎで撤去され、俺はハンガー出口へと急ぐ。

コックピット内に警告音が響いた。敵がすぐ傍まで来ている。

出口を得た瞬間敵アーマーと鉢合わせした。近すぎる。

「うわああ！」

無意識に胸部の20mmヴァルカンを発射。

胸部は戦闘機状態の機首部分にあたる。当然、機首に付いてる20mmがアーマー時には胸部の固定兵器となる。

アーマー相手に20mmは役不足だが、相手の行動を一瞬でも遅らせればそれでいい。

案の定、敵は突然の20mmの攻撃に一瞬たじろぎ、行動を停止してしまっている。

20mmの弾丸は敵の装甲を破壊する事なく、次々と弾かれて俺の足元とかに着弾する。

その隙に右腕に仕込まれている高振動ナイフを露出させた。

高振動ナイフはこういう出会い頭などの接近時に使用する為に考えられた。

通常の戦闘ではアーマー同士の接近戦はあり得ないが、今回みたいなケースを想定され、ヴァルシュナタイプから採用された。

ヴァルシュナの腕には左右とも対人用固定武装か、30mmガトリングが装備されている。

その砲身と腕の間に高振動の刃（やいば）を仕込んでいる。

必要になると刃の部分を伸ばし露出させ、敵に斬りつけるわけだ。

この装備をマニュアルで初めて見たとき、まさか本当に使用するとは俺を含め誰も思わなかった

。

もちろん、狙いは敵のコックピット。

振動時に発生する高温で刃は真っ赤になり、コックピットと思われる箇所へ突き立てる。

狙いは正解だったようだ。

中のドライバーのと思われる赤い液体がナイフで作られたスリットから飛び出した。

ナイフを仕舞うと、右足の太もも部分に取り付けられている55mmガトリング砲に手を伸ばしグリップを掴む。

55mmガトリングは戦闘機の状態でも機外には露出しないように太ももの装甲の内部へ収納する



ためサブマシンガンの形状をしており反対に左の太ももの装甲内部には予備のマガジンが3セット収められている。

1マガジンで300発。10秒も連射すれば弾切れ。

その為、作戦によってはベルト式給弾方式の機関銃を携帯することもある。

その時戦闘機状態では銃本体と弾薬は機体の真下に吊す形になるので空気抵抗が増す。

空中戦は出来ない状態だ。

俺のヴァルシュナは現在そのサブマシンガンを手にしてる。

ハンガーの影からさらに今の敵と同型のアーマーが現れる。

よく見ると、このアーマー。多少の偽装はおこなっているが、中国製の〔竜神〕じゃないか？

そのアーマーに銃口を向けた時、ミサイル警報が鳴った。ロックはされていない。

ミサイルの接近警報。

敵のアーマーはミサイル等の誘導兵器は積んでいないはず。

すると、コックピット内のモニタが飛翔中のロケットを補足し、拡大表示する。

丁度、この場所めがけて飛んできている。

巡航ミサイル？

多分、東京湾入り口に接近している潜水艦からだ。

と、なるとこのミサイルは弾頭に核が搭載されている可能性が高い...

そう、考えこの場から離脱しようと向きを変えると、目の敵が発砲してきた。

こいつは今接近中のミサイルに気づいていないようだ。

しかたがなく、応戦するために再度ガトリングを構え直したとき、もの凄い衝撃波が後方から機体を襲う。

補足した1発だけではなかったのか？

別の方角から打ち込まれたミサイルが俺の後方にあるハンガーに着弾したのだろう。

コックピット内の全モニターが光度を自動調節で一瞬で落とす。

コックピット内が暗くなると、今度はモニタに緑と青の光が映った。

緑と青の光の向こうに白く輝く「穴」が出現する。

機体はその「穴」に向かって押し出され出口(?)へ強制的に押し込まれる。

一瞬、めまいがし吐き気をもよおした。

それは直ぐに収まりモニタが通常の状態に戻ると今度は見慣れた基地ではなく緑一杯の草原が目飛び込んだ。

「？」

唖然としてるといつの間に居たんだろう...目の前に見慣れぬアーマーが数体立っていた。

さっきの敵のアーマーではないが識別コードは味方以外。つまりエネミーと判断している。

新型の新手か？

目の前のソイツは手にした大きな剣らしきものの振りかぶり俺に向かって突進してくる。

剣なんて武器を装備しているアーマーはないはず。

俺のヴァルシュナみたいに、いざと言うときの為のサブウェッポンだろう。

冷静に目の前のソイツに向かって55mmガトリングを発射させた。

毎分1000発程の発射能力を持つ対アーマー用のガトリングはソイツに命中し、その弾丸の衝突エネルギーで後方に倒れる。

さすがに対アーマー用兵器。

かなりの威力だ...しかし、よく見ると装甲には大したキズがついてない。

恐らく、大口径ゆえの運動エネルギーによって倒れたのだろう。

なんて頑丈の機体だ。

しかし、倒れた事で内部の機構もしくは搭乗者に致命的なダメージを与えたいらしい。

倒れたまま2度と起き上がる事は無かった。

もう一機居たはず？

と思い、機体を180°回転させ後方を見る。

後方はハンガーのはずだが、ハンガーは存在せず草原が広がっている。

そして、さっきとは違うタイプが剣を持って立っていた。

ソイツは両手を捕まれ身動きが取れないでいる。たんだらう。

ソイツは自力で押さえられた腕を振りほどき、剣を振り下ろしてソイツをやっつけた。

55mmでは破壊できないと思い、あの武器を試す事にする。

自分の左を見ると、もう一台残っている。

コンピュータのアプリをレールガンモードに切り替え、レールガン組み立てシケンスを開始する

。

組み立てが完了し、照準装置をレールガンとリンクさせる。

大型のライフルの要領でヴァルシュナに構えさせるとろくに照準をつけずに引き金を引く。

照準をするほど離れていないからだ。

「ヒュン！」

と言う軽い音と共に、弾丸は電磁力によって超高速で撃ち出される。

謎の敵の胸部に大穴が空いた。

そのまま続けざま3発たたき込む。

電磁力によって射出されるため、反動はいっさい無い。

それでいて火薬式とは違い弾丸が空気を切り裂く音のみで爆発音がしない。

合計4発食らったところでようやく動きを止め、その場に摺坐。

で、ところでここは一体どこだ？

頭上にはこの数年見たことのない青空と白い雲が広がっている。

足下は広大な緑の大地で、見た目にとってもきれいな川まで流れている。

ほんの数分前まで俺が居た木更津基地とは偉う。

一瞬「死後の世界？」とってしまった。

いくらなんでも、ヴァルシュナごとあの世に来てしまったとは考えにくい。

目の前にいるアーマーらしき人型に人は乗っているのだろうか？

## 第4話： 緑の大地と青い川

---

ハッチから体を出して空を見上げる。

今まで経験のない強すぎる太陽の光線を浴びた。

「何なんだ？ここは...木更津...では無いよな？こんな空、見たことが無い。」

それに、この緑の大地。

木更津の周辺にはまず無い。

俺は死んだのか？と一瞬思ったが、ヴァルシュナごと死後の世界に来たとは思えない。

なら、爆発の衝撃で飛ばされたのか？

「否」だ。

それに、アーマーを思わせる目の前の巨人も気になる。

とりあえず、ヘルメットを取り地上に降りることにした。

俺がヴァルシュナから降りると、目の前に立っているアーマーらしき人型からも人が降りてきた

。

アレも人が乗って動かしている事がわかる。

向こうも俺に用があるらしくまっすぐ俺に向かって歩く。

とりあえず、パイロットスーツの脚についているホルスターから拳銃を抜き取り、いつでも撃てるようにしておく。

さっきの戦闘では「敵の敵」といった感じだったけど、俺に対して危害を加えないとも限らないからな。

「ヤーハマーカキタ」

「????」

言葉がわからない。一瞬、どこかの方言かと思ったがイントネーションに至るまで俺がこれまで聞いたことの無い言語だと思う。

「何を言っているかわからない。英語はわかるか？Are you speak English?」

向こうも俺が何を言っているのかわからないのだろう首を傾げるゼスチャーをする。

「言能理解？」中国語や韓国語も試してみる。

相手の容姿から東洋人だとは思うが。

やはり通じない。

「ヤーハヌーアビトンバー？」

聞き取れない言葉が再度発せられた直後、女性の声が聞こえた

「ニライからのお客でございますね？」

明らかな日本語で安心する。

声はさっきの男の背後から聞こえた。

男の背後に視点を合わすと、巨人のさらに背後からカラフルな原色重視の着物を着けている女性が姿を表す。

「俺の言葉、通じるのか？」

「はい、私のような祝祝（ノロノロ）の一部はニライの言葉を代々受け継いでおりますゆえ。」  
何だか、馬鹿丁寧で少し古くさい喋りだが言葉が通じるので気にしないようにする。

「ずばり聞きたいのだが、ここ何処？」

「ここは中山（ちゅうざん）と北山（ほくざん）の境で第1方面隊の第1防衛線です。。」

「...日本なのか？」

しかし、中山とかと言う地名も聞いた事ないし、第1方面隊なんて部隊は日本軍に無い筈だ。

「日本？ですか...？」

「ああ、俺は日本から出た覚えは無いんだが。」

女の言葉から日本語のような地名が出たので日本だという認識でいた。

「恐らく日本というのは我々で言うニライの事でしょう。」

「ニライ？」

「はい、海の彼方にあると言われている国の事です。」

「ちょっと待て、さっき言ったように俺は日本から出た覚えは無い。ましてや海を渡るはずも無い。つい数十分前までは木更津基地で敵と交戦していたんだぞ！」

女の背後に居た先に俺に話し掛けた男が口を開いた

「ニライの言葉だったのか、ニライの言葉なら俺もどうにか喋れる。」

最初に気づけよと心の中で思ったが、さすがに口に出す事は止めた。

「ここは球陽（ティダ）の中で、中山と言う国だ。」

ティダと言う単語は知らない、日本語では無いかもしれない。

「恐らく、北山の奴等のクワンティーオが瞬間移動をしたときに巻き込まれたんじゃないか？過去にもそう言った例があると聞いている。」

「そうでございますね、少し昔にクワンティーオの空間移動に巻き込まれたニライの人がこちらの国に現れたと言う事はわたくしも聞き覚えがございます。」

「クワンティーオってなんだ？」

言葉は通じるようになったんだが、一部の単語の意味がわからない。多分固有名詞なんだろう。

「アレの事だよ」

と背後の巨人を指す。

「アレか？...あれは何だ？兵器か？」

「何だよお前も乗って来ただろ？クワンティーオと一緒に現れたニライの人は初めてじゃないかな？」

「俺のはアーマーと言う種類の兵器でヴァルシュナと言うんだが。」

ヴァルシュナと言う単語に反応したのか、目の前の男女はお互い目を合わせて驚いた表情をして

いる。

「ヴァルシュナだって!？」

「...?知っているのか？」

「テダでは子供でも知っている。神話でクワンティーオと戦った最強の神の名前だ。」

「神様と戦った？」

「ああ、クワンティーオは大昔、人間と神との戦争で使われた兵器だと言われている。」

「その戦いでクワンティーオの長、クジヌールと互角に戦い、人間の進行を止めた神の軍団の長がヴァルシュナと言う名でございます。」

「ちなみに、クジヌールというのはこいつの名前だ」

と背後の巨人を自慢下に指す。

よけい、頭の中がパニックになり右手で額を抑える動作をする。

神と人間の戦い?日本の神話にはそう言う話は無かったと思う。

「さて、話が別の方向に行きかけている。要はその兵器が特別な移動をする時の影響が何故かヴァルシュナごと巻き込まれたと言う事だな？」

「そうだろう、多分。クワンティーオは空間を移動する特殊能力があるんだ。」

そんな能力が俺のヴァルシュナにあれば戦闘機への変形はあまり意味がないだろうな。

え?もしかして異世界?完全にファンタジーの世界の話じゃないか。

しかし、意外と自分は冷静に状況を納得していた。

夢...じゃないよな。

頬に当たる風が夢じゃない事を教えてくれている。

わざわざ頬をつねる必要は無いだろう。

なら、現実だ。

日本語で会話ができているが、ここが日本じゃない事は明白。

こんな緑だらけで地平線の見える草原なんて、木更津基地の近辺どころか、関東にはない。

「そう言えば、俺は戦闘中にでかい爆発に巻き込まれたんだっけ...」

あの爆発の規模は恐らく戦術核未満で中規模の気化爆弾だろう。

爆発とこの世界のアーマーの特殊な移動に何故か巻き込まれこの地に移動したのだと言う事か?

死語の世界でもなさそうだ。

天国なら兵器なんていらないうし、ましてやアーマーごと天国に来るわけがない。

「では貴方様は自分の意志で来た訳ではございませんのですね？」

「自分の意志ならここは何処だと聞かないだろ？」

また、この二人はお互い見詰め合って何やらアイコンタクトを取っている。

「まあ、いいや俺の名前は儀間清瀧（ギマ・セイリュウ）、こっちが妹の正美だ。」

妹と紹介された女性は深深と頭を下げる。

名前なんてもろに日本人名じゃないか。本当にここは異世界か?

俺のイメージでは異世界と言うのは中世時代の西洋で、指輪物語やドラゴンランスの世界だ。

しかし、〔ギマ〕と言う苗字は聞いたことが無い。

取り合えず俺も自己紹介。

「俺は日本軍木更津基地所属第1航空隊所属、片寄隆一」

「俺等の王から...多分あんなの事だと思うが連れてくるよう頼まれた。城まで来てくれないかな？」

「何故？」

「王が俺等兄妹に勅命を下されたんだ。今日のこの戦場にニライから客が来てくれるから丁重にお迎えしろと。」

意味がわからず硬直しているのに構わず妹の方が話を続ける。

「恐らく我が王はご存知だったのですわ、お客様がニライから来る事を。だから、ニライの言葉がわかるわたくしら兄妹に勅命をくだされたと思われます。」

ここで、ふっと気が付いた自分がこの状況を受け入れている事に。

普通ならファンタジー小説みたいな出来事は夢と思うはずなのに。

何も気にせず当たり前前に周囲の状況に溶け込む。本来の俺はそんな性格ではないはずだ。少なくとも自分ではそう思っている。

「これじゃ、茂斗子みたいな性格じゃないか」

思わず呟いたが、確実に言える事だが、あの大橋茂斗子ならこのような状況でもあたりまえのように受け入れすぐに馴染んでしまうだろう。

それとも、現実離れすぎて頭が変になったか...

「ここに居てもしょうがない。その王様に会わせてくれ。俺が来る事を知っていたんなら帰る方法も知っているだろうから聞き出してやる。」

「...一応、王の前では失礼の無いようしてくれよ。王もニライの言葉がわかるからな。」

さっきの俺の台詞は普通に考えれば一国の代表に向かって使うものじゃないな。

自分の知らない世界だと思ってつい、言葉が荒くなったようだ。

「申し訳ない、気をつける。」

ふっと周りを見渡すと、大勢の兵士がこの場から去るところで川と反対側の森に向かって歩いてゆく。

「で、歩くのか？それともアーマーごと城へ向かっていいのか？」

「クワンティーオごと来てくれ。俺が先導し案内する。正美！お前も俺のクジヌールに乗れ！」

自分のヴァルシュナに乗り込みスタンバイ状態からアクティブモードへ切り替える。

エンジン音が再び響きだし膝をついている状態から直立動作を起こす。

レールガンを再度ばらし、後付のハードポイントへ取り付ける。

前面のパネルの一部に赤いLEDが点滅している。警報音は鳴っていない。

警報が鳴っていないので、大したエラーでは無いと一瞬思ったが甘かった。

「！？変形システムの故障？」

あわててヘッドダウンディスプレイを整備モードにし、自己診断ソフトを走らせ原因を探る。本来ならこのソフトが検出した要整備個所を整備員が端末に取り込みそのデータを元に整備や修復を行うのだが。

cause is uncertain.

数秒後、ディスプレイに表示された文字は原因不明の故障箇所があると知らせる。機体のコンピュータでは原因究明が不可能だと言う事だ。

『おい！動けないのか！』

外から拡声器で拡張された声が聞こえる。

聴覚センサーはONになったままだった。

こっちも外部スピーカーへ音声を伝える

『大丈夫だ！今行く』

機体は、あのクジヌールと呼ばれる巨人の後ろに向かって歩き始めた。

## 第5話：赤い瓦屋根

---

ヴァルシュナの足で約1時間ほど歩いただろうか。回りが小高い丘や林だらけだった風景に変化が見えてきた。

ぽつぽつとだが、民家が見えてきたのだ。

この民家も見覚えの無い形をしている。

日本古来のかわぶきや瓦を使った家では無い。

瓦は瓦だが、瓦自体は赤く玄関らしい入り口が見当たらない。

外からすぐに家の中に入れるような、開けっぴろげな作りをしている。

確か、沖縄の博物館で見たような家に似ている。

そんな事より心配事がある。

長時間ヴァルシュナの足で歩いた事が無いのだ。

いつ、間接のモーターやサスペンション等のパーツが故障するかわからない。

長距離の移動はヴァルシュナで無くても普通アーマーはしない。

専用のトランスポーターか輸送機を使う。

ヴァルシュナは当然自分で空を飛べるので、そんなオプションは必要が無い。

何故か今は変形システムがいかれていて、原因も不明。一度ヴァルシュナの動力を全て止めてコンピュータで故障箇所を特定させる必要がある。

しかし、当然ながら今は城とやらに向かって「歩いている」最中。

戦闘中、「走ったり」するのは短時間だからあまり気にならなかったが、長時間「歩く」というのは搭乗者にかなり負担がかかる...

シートの下にショックアブソヴァーがあるといっても多少ショックを和らげる機能があるだけで、リムジンのような乗り心地はまず望めない。

下手すると、まだラリー車やブルトラーの方がマシだったりする。

さすがに俺も酔ってきた...

ヴァルシュナにはエチケット袋なんてものは無い。

『おーい、聞こえるか!』

周囲10Kmは届くような拡声器の声がコックピット内にも届く。

外部の音を拾う装置を働かさなくても十分に聞こえる。

こっちは声を出す気力も無いので、ヴァルシュナの「腕」を上げる動作をさせる。

サイドスティックをほんのちょっと動かすだけだ。



『ここからは、俺のすぐ後ろに付いてくれ』  
意味など考えず、言われた通りに奴の真後ろに付ける。

奴の真後ろに付いた瞬間、俺はアーマー酔い(?)の為、頭がおかしくなったかと思った。

何も無いはずの空間からいきなり崖が現れ、自分等の進路にあたる部分が黒い空間が出現したのだ。

『出来るだけはぐれないようにしてくれ、でないと変な所に出るかもしれんからな』  
と言った直後目の前の暗い闇の中に溶けるように消えて行った。

未知の恐怖もあったが、取り残される不安の方が勝り、慌てて後に続く。

黒い、闇に向かって歩き始めた瞬間。視界が一気に変わった。

かなり広めの原っぱで目の前には小高い丘が見える。

その丘の上には城壁らしい石造りの壁が何かを隠すように佇んでいる。

中国の城のような感じだ。

『あれがナカグスクだ。城壁で全体が見えないけど結構立派だぞ！南山(なんざん)のシュリに負けないと思っている。』

丘の麓には大きな湖がいくつかあり、その湖が日本の城でいる外堀とかと同じ役目を持っているんだろう。

『クワンティーオを置く場所はこの先にある、ついて来てくれ』

先と同じように奴の後について行くとまた、視界が一変した。

今度は丁度自分等が使っているハンガーみないな感じの建物の中。

自分も目から見ると古臭い道具が散乱し、天井からは鎖が何本か垂れ下がっていた。

『そこの木で作られた枠内にソイツを置いて降りてくれるか?』

巨人の指で指された方向に機体を向けると、ソイツが乗っているのと似た巨人が壁に沿って並んでいた。

それぞれを木の枠で括られ、人が沢山回りをうろちょろしている。多分整備する人たちだろう。

ヴァルシュナは回りの巨人に比べてかなり異質なデザインと一発でわかる。

そのせいか、足元の人たちは作業する手を止め、ヴァルシュナを見上げている。

とりあえず、空いているスペースにヴァルシュナを歩かせ、両足のメインエンジン2基の火を落とす。

発電用の小型エンジンをかわりに動かし、必要最低限の電力を確保する。

基地では、電源車はあるが、ここには無い。

どうせ、エンジンの燃料は大気中の空気から得ているので、発電くらいならこのまま回しておいて平気だろう。

ハッチを開け、地面に降りる為のケーブルをハッチ横から取り出し、ケーブルの先に付いている三角形の金具に足をかける。

ケーブルを掴み、腕時計に仕込まれているリモコンでケーブルを下ろす。

着地地点には既にあの巨人から下りたアイツ...確か儀間と言ったか?...が待っていた。

「よく見れば見るほどクワンティーオとは異質な形をしているな...」

降りてきた俺を見ずにヴァルシュナを見上げている。

「それはこっちの台詞だ。俺から見たら君の...ク...クウ...」

「クジヌール！」

「とにかく君達のソレは俺から見たら異質だ。」

「そりゃそうか。」

コイツは笑いながら回れ右をし、後ろ向きに「ついて来い」と指で合図をする。

ヴァルシュナの「足」にある収納スペースからいつも持ち歩くバッグを取り出し肩にかけた。

バックの中には第2種と第3種夏服のシャツとスラックスが入っている。

ネクタイもあるが、この世界に人相手にはネクタイが無くても失礼に当たらないだろうと勝手に判断。

バックには後拳銃も入っているが取り合えず黙っておく。

ヴァルシュナの時と同じように、俺はソイツの後ろをついて行く。

「そう言えば、君の妹さんは？」

「もう、王の所に向かっているよ。」

その返事を聞いた直後、俺の真後ろから大声が聞こえた

「ちょっと！そのあんた！」

反射的に振り向くと、儀間と同じような服を着た女がすごい剣幕で俺に向かって指を指している。

「？俺の事か？」

「そう、そんな変なゴワゴワな服を着ているあんたよ。」

俺は機体から降りてパイロットスーツは脱いでいない。

恐らく、いや、確実にこのパイロットスーツの事を「ゴワゴワ」と言っているんだろう。

それよりも、あの儀間兄妹しか言葉が通じないはずだが、なんでこの娘まで言葉が通じるんだ？

「あんたのクワンティーオが置かれている場所は、私の指定席なんだけど？」

「ああ、悪い。後で退かすから勘弁してくれないかな？」

多分、王と呼ばれている人物のところへ行くのが最優先と思ってこう言った。

何事かと、歩くのを止めた儀間が振り返り、弁護してくれる。

「すまないな、宜保、ニライからの客人なんだ。王の間に連れて行くことを最優先にしたい。」

宜保（ギボ）と呼ばれた女性は文字通り顔を膨らまし、まだ何か言いたそうな口を無理やり閉ざした。

「置き場所は決まっていはいないんだから、客人に文句は言わないでくれ。」

「わかったわよ...」

あまり納得していないような顔のまま**180°**回れ右をしてこの場を去っていく。

「すまないな、たまに自分専用の置き場を勝手に決めている奴もいるんだ。別に君がああのヴァルシュナを退かさなくてもいいぞ？」

「ああ、再起動をかけて動かすのは面倒だ。」

あの女性、誰かに似ている...

ああ、そうか...茂斗子だ。大橋茂斗子に似ているんだ。特に声の大きさが。

「しかし、何故言葉が通じたんだ？俺の耳に届いた台詞と彼女の口の動きが合っていないが？」

「説明が面倒だから、取り合えずこの城の中ではそう言うものだと思っていてくれ」

「？」

ハンガーと思わしき建物から一旦外に出るとさっきまではヴァルシュナの中に居たせいか気づかなかったが、かなり日差しが強い。

まさに、刺すような日差しだ。

パイロットスーツを着けたままなので、一瞬で大量の汗がでる。

「すまない、儀間さんちょっと着替えさせてくれ。この格好では暑くてしょうがない。」

「清瀧と呼び捨てでいいぞ」

やはり、ここは俺も呼び捨てでいいと言うべきか？

「その代わりにお前の事も呼び捨てでいいよな？」

「...ああ、隆一でいい...」

周囲に誰も居ないが一応変な形をした木下に移動しスーツを着替える。

丁度、制服は夏向けの半袖と薄い生地のスラックスだから、ここの気候でも平気だろう。

この制服は日本軍が自衛隊だった時代から今まで変わっていない。

「さっきの服も変だったが、今度のもまた変な服だな。」

人の事言えるかと心の中で悪態をつく。

儀間...いや清瀧が着ている服は一瞬着物にも見えなくは無い。

しかし、着物よりも動きやすそうで、生地も薄く思える。

「これは、俺が居た世界では一応制服にあたる。王様に会うなら変では無いとおもうが？」

「白が基調か、清潔そうでかっこいいな。」

本当は帽子も必要なんだが、どうやら入れ忘れていたらしい。

石で舗装されている道を道なりに歩く。

中国風の大きな門に何やら文字が書いてあるが、やはり読めない。

その門を潜るとしばらくしてまた門があった。今度の門は石を使ったアーチ状の門。この門にもやはり何やら文字が書いてある。

いくつかの門をくぐり、階段を上る。城壁の外周にそって、らせん状に内部に入るような感じだ。

恐らく、外部からの進入に備えた作りだろう。

やがて赤を基調とした建物が目に入った。

日本の城とは違い高さはあまり無く、何階建てかは外見ではわからないが、あっても3階くらいだろう。

広場を中心としてコの字型に建物が配置されている。

建物の真正面には行かず、一番端の建物のさらに一番端の入り口から入る。

履物は脱がなくても良いようだ。

板で作られた建物の中に入った瞬間。程よい加減の風が体を通り抜ける。

空調から吐き出される風の感触とはえらい違い。風自体が体を癒すような効果がある感じだ。

「いい風だな、これは自然の風か？」

「ああ、この建物はちゃんと風の通り道を考えられていて、風をおこす魔法は要らない。」

「魔法って、俺の居た世界では無かった。魔法ではどんな事ができるんだ？例えば生活に役立つ面とか。」

ここに来て初めて魔法と言う単語が出てきた。

異世界に来たと認識してから、いつかは出るだろうと思っていた単語だ。

現に、ここに移動する時に日本では考えられない空間移動と思われる事を体感したのだから。

「そうだな、生活密着型というのは基本的に公共の場にしか使用されない。この城では夜、明かりを点す為とか長距離の移動に使用したりとか...」

「一般人は魔法は使わないのか？」

「一応魔法に頼らなくても生活は出来る。遺跡から発掘された技術を利用して生活に必要な機械が各家庭に備わっているんだ。明かりとか、料理に使う火とかそういったものだ。」

「もしかして、電気やガスみたいなものか？俺の居た世界では電気をエネルギーとして明かりは当然、料理に使う火。それ以外にも暑いときは涼しく、寒いときは暖かくしてくれる機械、そして遠距離の人と話せる機械とかがある。」

「なんだか、ニライの方が進んでいる感じだが、まあそんなもんかな？」

「もう少ししたら正殿に入る。正殿はもう王の居住になるから武器など持っていたら入り口で預けておいてくれ」

とりあえず武器は拳銃くらいだが、この人にそれが武器だとわかるのだろうか念のためバックの中に入れてままにする。

正殿の入り口に来たとき、警備らしい人からちゃっかり拳銃を取り上げられた。

「この場には武器と思われる物を検知する魔法がかかっております。どんな小さな小

刀でも見逃しませんよ。」

笑いながら拳銃を何か嚴重そうな箱の中にしまった。

「武器は出せと言っただろ？」

「すまん、あれはわからないと思ったんだが...でも、万が一の時自分の身を守るためだぞ？」

嘘をついた。拳銃なんてわからないと思った俺が浅はかだったようだ。

「一応言っておくが、ああ言う形に似た武器はこのティダにもある。もう少し大きいけどな。」

そう言えば、初めてこの世界に来た時、あの巨人同士の戦いでもこいつ等は使っていたな...

豪華な装飾や彫り物で飾られた扉の前で俺達は跪く。

扉の両側で控えてた男二人が突然何やら大声出し、扉を静かに開いた。

扉の先には俺達よりも高い所に添えつけられている椅子が見えた。

その椅子には中国の皇帝に似た服装をしてる人が座っている。

恐らく、その人物が王様だろう。

俺は、ここに来て初めて緊張した。

## 第6話：赤い城と白の巨人

---

王の間は思ったよりは広く無かった。

とは言っても自分の想像での王の間が広すぎた訳で、逆に狭いと言う印象は無い。全体的に下地に赤色が使われており、所々の模様が金色と言う結構派手な感じだ。家具などのデザインはどちらかと言うと中国ぽい。

少しだけ高くなっている場所があり、そこにはやはり赤色に塗られている椅子がある。

どう考えても玉座だろう。

玉座の両側に立っている柱には金色の竜が描かれており、玉座の上には何か文字が書かれているが、当然読めない。

玉座の手前3メートル程の位置で俺は膝をついて座り、俺の後ろにはあの儀間兄弟が立っている。

王は意外と見た目は若く、**30代後半から40代前半**くらいか？

八の字のひげが特徴的だ。いかにも、と言う感じがする。

着ている服は着物に似ているが、中国の皇帝が着ていた服に近い。

その玉座の左右後方には初老の男が直立不動で立っている。

最初に口を開いたのはこちらから見て右側の初老の男だった。

「御前におわすは中山の国主、寧王（ねいおう）である。王自らのお言葉を頂ける事を感謝せよ。」

まだ、何かを言いかけていたが、王が左手をあげ、征す。

「遠路より、よくぞ参られたニライの客人よ。先の戦での助太刀、私からも礼を言う。」

映画で同様の場面があったこと思い出し、できるだけ言葉を選んだ。

「いえ、相手がいきなり攻撃してきたものですから...」

「ほう、では儀間がその方に先に攻撃を仕掛けたら、北山の連中の味方になったと？」

実際にはそうなんだが、さすがに言える訳が無い。

言葉に詰まっていると、先に向こうから話し始めた。

「冗談だ。聞いたと思うが、儀間はその方を迎える為にあの戦場に私が使わした。その儀間がそなたを攻撃する訳がなからう」

そう言えばそんなこと言っていたっけ。

「では、お聞きしてもよろしいですか？」

俺は予てからの疑問を問いたかった。

「うむ、よかろう...その前にそちの名前を先に教えてもらえないか？」

「片寄隆一...」

「！？かたよせ？」

「はい、何か...？」

「いや、それで聞きたい事とは？」

変な所で俺の名前を聞き返すものだから、自分の疑問を一瞬だけ忘れてた。

「あ...あ、そうです。何故俺...私が今日あの場に現れるとご存知だったのでしょうか？」

そう、清瀧は俺が現れる事を知っていてそれで、アノ場で待っていたと言っていた。それも、王の命令で。

「何、簡単な話だ...私直属のユータの言によって、今日あの場所に現れる『ニライからの客人を助けよ』と、私に言ってきたのだ。」

ユータ...占い師か何かだと直感的に思った。昔の政治ではよくある話だ。

「その、客人はティダ統一には欠かせない人物となる...と。」

まいった...これこそ、ファンタジーの王道ではないか。

いきなり、異世界に呼ばれ「お前は世界を救う勇者だ」なんて言われている事とまったく同じ。

「大変、光栄な事ですが。私は日本では単なる兵士でございます。国の命運を左右するような器ではとても...」

謙遜ではない、そんな不可解な言葉だけで勇者なんて祭り上げられてたまるか。

「まあ、私もそんな力がその方に備わっているとは、とても思えんが...」

あっさり言いやがった。

「しかし、過去にニライから来た者には我々には無い知識や経験があり、大なり小なり政（まつりごと）を変えたと言う。」

異なる文化、魔法をもつこの世界でも、俺が居た日本より遅れている感じがする。

軍事力だけは飛びぬけた江戸時代とでも言うべきか？

「それだけでも、そなたは客人として我が国に居てもらいたいのだが？しかもクウワンティーオまで持ってきていると聞く。」

「クウワンティーオはどうだか知りませんが、私のヴァルシュナは常に整備が必要です。しかし、一介のパイロットである私は最高の状態に整備する事は出来ないの



です。つまり、この先、あれで戦闘を行えと言われても無理でしょう...」

俺の後ろでずっと黙っていた清瀧が初めて口を開く。

「クウワンティーオも整備が必要だ。なるほど...その辺はティダの兵器もニライの兵器も変わらないんだな。」

少しだけ、会話に間があく。

次に発言したのは寧王だった。

「なら、クウワンティーオの適正を受けてみないか？今まで例が無いが、ニライの者でもチャスになれるかもしれんぞ？」

「余分なクウワンティーオがあるのですか？王よ！」

玉座の横に立っていた初老の男が大声を上げている。

後ろからも清瀧の声が聞こえた。

「今、国内のクウワンティーオは全てチャスが決まっているはずですよ！余分なのは1騎たりとも残っておりません！」

俺はどう言う事なのかさっぱりわからないので黙って座っている。

「1騎だけある。この城の地下にな。」

「まさか！王専用の事ですか！」

「専用と言っても私ではあれを動かせん。」

「王自ら動かす必要はございません！あれは中山の象徴ですよ！」

まあ、よくある事だ。権力者の専用の乗り物や鎧と言った者は。

ん？でもその専用を俺に動かしてみろと言っているのか？

「北山に比べてクウワンティーオは数が圧倒的に少ないと聞いた。なら、動かせるのなら1騎でも多い方が良いだろう？彼のアーマーは使えないようだし。」

初めてアーマーという単語を使ってくれた。

しかし、俺を置いて話が進んでいる。

チャスと言う単語の意味は最初わからなかったが、聞いている内にパイロットを指す単語だとは予想がついた。

「それに、チャスと決まった訳ではないだろう？とりあえず、試すだけではいっかんか？」

「試すだけでしたら...」

一同が王の言う事に反論できず、当事者の俺を置いて物事が進んでしまった事に誰も気づいていない...

「王よ、お聞きしてもよろしいでしょうか？」

「構わぬ。」

一応、王の両サイドにいる男達は俺の発言を止めようとしている。

俺みたいな者は王と直接話す事を良しとしないのだろう。

しかし、王は逆にそんな事はどうでも良い感じにいる。

「チャスとは何なんでしょうか？私の国にそのような言葉がございませんでしたので...お話を聞いている限りクウワンティーオを動かす人の事、もしくはその資格がある者を指すようでございますが？」

「うむ、厳密にはクウワンティーオが選んだ者の事だ。」

俺の後ろに居る清瀧が会話に加わってきた。

「王、後は私が...クウワンティーオには意志がある...と俺は思っているのだが...クウワンティーオは己を操縦するものを選ぶんだ。多分相性のようなものかもしれない。」

俺のヴァルシュナがセキュリティーの面がある為、機体はパイロット固定する。

そういった事とは別なのか？

「その為、人を選ぶんだ。今の話にあるように王専用として存在するクウワンティーオでも歴代の王の中から実際に乗れた王はあまり居ない。」

「とりあえず、王の言うとおりに地下の専用の格納庫にお出でください。」

王を先頭に王の側近、儀間兄弟、俺、警備兵の順に並んで地下に続く階段を下りる。

王が居た間から隣の部屋の隠し扉を潜った所から地下へ向かう階段が伸びていた。

「一応、私専用のクウワンティーオは『トウイヌ』と言う名前がついているが、もし万が一お主がチャスに選ばれれば勝手に名前を変えてよいぞ？」

「まだ、決まっておりません、王が気が早すぎます！」

側近とはさっきから漫才をしている。もちろん全然笑えないが。

「まあ、チャスでは無かったとしても、近衛軍に入ってはもらえないか？軍事指導者として。」

「私の軍事知識が役に立つのでしたらおおせの通りにいたしますが、はたして役にたつでしょうか？」

どうも、この言葉遣いは疲れる。軍で上官に対する敬語とはまた違う敬語だからって事もあるが...

一人で3騎ものクウワンティーオを倒したのだ。それだけでも十分だと思うが？なあ？儀間よ。」

「はい。その通りでございます。いくら相手がウティンだったとしても、いきなり3

騎も完全撃破をされた事はティダの歴史ではそう無いでしょう。」

目的の階についたようだ。階段が終わり10人ほどの人が余裕で入れる広場になっている。

その奥にまたもや赤と金色の配色が施された扉が見える。

実は後で清瀧に聞いた話だが、赤と金。そして竜は王を表しているそうだ。

王みずから扉の錠を開けると、側近がその赤い扉を開く。

観音扉なので左右に分かれる形だ。

闇が部屋の中を支配している。

「おぬし一人で奥へ行くのだ。」

警備兵に肩を軽く押される。

まさか、ここでいきなり扉を閉めて俺を閉じ込める訳ではないだろう。

今までの経緯からそんな回りくどい罠はありえない。

扉を潜り、闇の中へ進む。

ここへ来る途中の階段で薄暗かった為、この闇にも直ぐに目が慣れた。

奥に何か白いぼやとした大きな物体が見える。

多分、王専用のクワンティーオなんだろう。

その、物体に向かい歩き始める。近づくとつれ白い影は人型なのが見えるが、細部まではさすがに見えない。

かなり近くまで来た時だった。

暗くて距離感がはっきりしないが、物体までおよそ5mくらいの場所まで来た時。

白い影はいきなり吼えた！

びっくりして足を止める。

清瀧のクジヌールと同じ音だ。吼えたのでは無く、エンジンか、それらしいのが動いたのだろう。

白い影は直立状態から身を屈める。

まるで、俺に対して跪いているようだ。

やはり自分の意志を持っているのだろうか？

ここまで来ると、細部まで判別できるくらい目が暗闇に慣れてきた。

巨人の首の付け根に空間が空いている。恐らく乗り降りする為のハッチか。

巨人は手を俺に向かって差し出し、手に乗れと言っているようだ。

差し出された手に乗ると胸の上、首の付け根の空間に近い所まで俺を運んでくれた。

間接の関係で、ハッチのすぐ側までは寄れない。

ここまで接近すると、こいつの顔が見える。

一瞬絶句。なんと言う事だ。俺のヴァルシュナの顔にそっくりなのだ。

アーマーの場合、外見的な『目』は無くゴーグルを掛けているような状態で、その奥に各種センサーやカメラ。近距離用のレーダーが内臓されている。

清瀧や、先に戦ったウティンとか言われているクワンティーオの目もそうだった。

しかし、こいつは両目が付いている。

それも、人間の目にそっくりで黒めに瞳孔まで見える。

俺のヴァルシュナに人間ぽい目を書き入れた。と言う感じだ。

その両目が俺をじっと睨んでいる。

値踏みするような睨み方だ。

その『目』にびびりながらも首の付け根に空いた空間へ体を入れる。

その空間にはシートが付いていた。そのシートに座ると周りが急に明るくなる。

目の前に20インチのTVほどの大きさをしたモニタらしき物体に映像が写し出される。

直後には左右に同様なモニタに光が出る。

モニタには、この部屋の入り口近くに王やら儀間兄弟やらが立っているのが映し出されているが、その映像はヴァルシュナのナイトビジョンのような色合いだ。

人らしきものが居ると言う程度の解像度。

シートの左右に付いているレバーがまるでアーマーの操縦桿だ。

両方のレバーに手を伸ばし、アーマーと同じように握る。

すると、全身に電気が走った。

それも、スタンガンを両手に同時に突きつけられたような電気の走り方だ。

一瞬だけ俺は気を失う。

すぐさま目を覚ますと目の前のモニタに文字が出た。

最初はこの国のあちらこちらで見る文字。

それが、変化し日本語になる。

「え？日本語？」

この世界に来てから1日も経っていないが、日本語の文字が懐かしい。

その文字はこう書いてあった。

『起動完了』

『各種設定を初期化しました。私に名前をつけて下さい。』

まるで、パソコンのゲームだ。

しかし、入力用のキーボードかそれに類する物が無い。

もしやと思い声に出してみる。

「ヴァルシュナ...お前の名前はヴァルシュナだ。」

一瞬の沈黙の後、画面に再度日本語が表示される。

『設定完了。私の名前はヴァルシュナです。』

## 第7話：金の模様と白の服

---

城から離れて、とりあえずと言う事で客室へ案内された。

案内したのは儀間妹...政美だ。

あいかわらず、原色を多く使った着物らしき物を着ている。

十二単を何枚か省略してカラーデザインを赤とか黄色とか原色をバリバリにしたようなもの？

目的の部屋へと着く。

入り口はスライド式の戸でここも赤色に塗られている。

ホントこの城は赤が好きだな。

このティダ以外にも国があり中山は3国の中で一番外国との貿易が盛ん。

ティダの国自体海に囲まれた島国だそうで、海を西へ渡ると蓬萊と言う国があるそうだ。

南の果てにも国があるが、その国との国交は無いとの事。

東へはいくら行っても島は無く、それで東の果てにはニライと言う幻の国があると言われている。

。

ここは、その外国の使者が宿泊するために用意されている。

とりあえず、今日だけこの部屋を使わせてもうらう事になった。

「食事は後ほどここへ届けさせますので、ごゆっくりしてください。あ、何かあれば隣の部屋に従者がおりますので、何なりとお申し付けください。」

さすがに外国の使者や要人が泊まる部屋だ。結構豪華な作りになっている。

テーブルに椅子、そしてベットが備え付けられ俺の世界の外国の一流ホテル並の設備だ。ただし、デザインは何となくオリエンタル風だが。

バッグを（まだ拳銃は返してもらっていない）テーブルの上に置き椅子を手前に引いた時だった。

。

はいるぞ！の言葉と殆ど同時に男が入って来た、清瀧だ。

「よう、結構いい部屋だろ？今日だけの措置だ。明日には格段に下がった部屋に移ってもらう事になるがな。」

「明日からの部屋がどうなのかは知らんが、この部屋は俺の性に合わない。」

木更津基地の宿舎の下士官用はビジネスホテルの1人部屋並で極々平凡。

新兵や訓練兵なんて4人部屋で窮屈な思いプライバシーが無い環境だ。あ、ちなみに軍曹以下の階級の者もだけど。

「しかし...驚いたな...まさか本当に王専用のクワンティーオの名前を代えちまうとは。」

「...驚くところはそこか？」

「ん？チャスの件か？」

話によると、チャスになれる確立はすごい低いらしい。

この世界に確立論なんて数学的な理論は無く、具体的な数字は無かった。

だいたい、戸籍自体この数年でようやく始めたそうだから、全人口なんて把握していないそう  
だ。

よくこれで、税金...いや年貢かな？の取立てができるなと思う。

「俺自身、そんなモノになれるとは思っていなかったんだが...」

「まあ、本音を言うと俺もだ。王専用は王族のみと思い込んでいたからな。実は今日初めて知  
ったんだ、現在の王はチャスではなかったて事がな。」

その件に関しては口外無用とのお達しが出ている。

さすがに、王が専用機を動かせないなんて全兵士、いや国民が知ったら...

その為、何人かの整備員に内密で王専用クウワンティーオの外装を変更するようにするそう  
だ。

「王の話によるとお前は俺と同じ近衛軍に入ってもらえる事になるそうだ。」

この後延々つづく清瀧の話によると近衛軍はその名の通りに王直属の組織で俺を抜かすと総勢1  
5名程。

それぞれにイメージカラーが割り当てられる。

黒、青、赤、緑、黄...と原色の7色に8色が追加される。

そして、俺のイメージカラーは白だそうだ。

今まで、白は無色の意味合いがあったので使用される事は無かったが、イレギュラーである俺に  
割り当てられた。

後日、その白を基調とした服を逃えてくれるそうだ。

「今、お前が着ているそのニライの服も白だから丁度いい。」

「？まさかとは思いますが、この制服を見て決めたんじゃないだろうな？」

「さあ？」

近衛の中にもやはりリーダーが居る。

そのリーダーのイメージカラーは黒。

俺の目の前に居るこの清瀧がリーダーだそうだ。リーダーに選ばれた者はそれまでの色を捨て、  
必ず黒となる。

今になって気づいたんだが、よく見ればこの清瀧の服は白が多いが下地になっている部分と肩か  
ら伸びているマントらしき布は黒だ。

ここへ来る前に格納庫で会った茂斗子に似た女は白と緑をあわせた色使いだったけ？

「大抵、白を基本としてそれぞれに割り当てられた色を使うんだ。」

「白が基本？それじゃ俺の場合は？」

「真っ白じゃないか？」

何を当たり前な...みたいな顔と口調で即答した。

それもそうか、と俺も納得したんだが個人的には俺自身は白は似合わないと思っている。

「明日、丁度近衛のチャスが全員揃うんだ。その時に紹介してやるよ。」

と言いつつ、清瀧は部屋を出ようとしたが、俺はそれを止めた。

「待ってくれ俺のヴァルシュナが心配だ。さっきの格納庫へ連れて行ってくれないか？」

「どっちのヴァルシュナだ？」

そうだった、あの王専用...もとい俺が譲り受けたクワンティーオの名前を俺がヴァルシュナと変えてしまったんだっけ。

王自身もまさか本当に名前を変えるととは思っていなかったと言っただけだが、ヴァルシュナの名前を聞いた瞬間それがいいと太鼓判を押してくれた。

最初に会った当時の儀間兄弟もそうだったが、ヴァルシュナの名前ってこの世界では結構有名なんだな。

「もちろん、俺が最初に乗ってきた俺の世界のヴァルシュナだ。」

「城は広いからな、俺はこれから別の用事があるから案内できないが、隣の部屋にいる従者の瀬底と言う者に頼むといい。」

瀬底と言う見た目10代中盤くらいの若い子に案内を頼むと快く引き受けてくれた

来た時よりも倍の時間がかかったのは気のせいではなく、清瀧と瀬底では「通れる道が違う」事が原因だった。

「すいません、僕は...いえ私は身分で言えばこの城の中で一番下っ端なんです。」

「いや、そんなに急いでないから別にいいよ。それのおかげでこの城の様子がよくわかる。」

「それに、格納庫までは私は行く事ができません。途中までです。」

これは、この世界のセキュリティなんだろう。

暫くすると、見覚えのある建物が見えてきた。

例の格納庫のはず。

「お客様、申し訳ございません私はここまでしか案内できません。」

と、深くお辞儀をして誤っている。

「いや、無理に案内してもらったんだ誤る事はないよ。ここまで案内してくれてありがとう。」

顔を上げると少しだけ笑顔を見せ、今来た道を早足で戻って行った。

「さて、セキュリティと言うような物があるとしたら俺、入れるかな？」

木更津基地ではヴァルシュナ用のハンガーでは出入りするには専用のIDが必要だった。

最高機密の兵器をバラす場所だ。セキュリティは基地司令部とシステム部署並に厳しい。

クワンティーオは恐らくこの世界の最高兵器のはずだ、ならばここにもセキュリティらしきのがかかっているもおかしくは無い。

入り口に立ち、ドアを開けようとしたらびくともしない。

案の定か？

「あんた、そんなところで何をしているのよ。」

俺の真後ろから急に声がした。

意識を目の前のドアに集中していたせいか、後ろに人が居た事に全然気づかなかった。



「...見ての通りだが？」

「見てもわからないから聞いているの。」

「ここ、鍵か何かかかっているのか？入れないんだが？」

怒っている表情から呆れたと言うような表情に変わる。

初めて会った時は急いでいたから全然容姿を覚えていなかったが、今よく見ると結構かわいい顔をしている。

髪は後ろで束ねて、ポニーテールにしているが、長さは腰程。

最近の日本でさえ滅多に見られない漆黒の黒髪だ。

身長は俺の肩より若干上なくらいだから150cm前後か？

服は白地に緑色、このデザインはさっき知ったばかりの近衛の制服だ。

「ここは誰でも簡単に入れるような場所じゃないの。許可を得た者以外は出入り禁止！」

「中にある俺のヴァルシュナの様子を見に来たんだが？」

「あ、そうか...丁度いいわアノ場所から退かしてよ。私、あの場所が気に入っているの。」

「その為にはここに入る必要があるんだが？」

「...」

丁度いいタイミングで清瀧が中から顔を出した。

あまりにもタイミングが良すぎで中からこちらの様子を伺っていたんじゃないかと勘ぐってしまう。

「何やっているんだ？」

この女と同じ事を言いやがる。

「「見てのとおりだ（よ）」」

語尾を除いて二人でハモッてしまった。

「見てわからんから聞いている！」

「なあんだ。とりあえず二人とも中に入れ。」

「え！こいつ中に入れるの!？」

この女は俺を中に入れたくないようだ、そんなに嫌われているのか？

「もう、仲間なんだから別に文句は無いだろ？」

思い返せばなし崩し的に状況が勝手にどんどん進んでしまっている。

これでいいのか？

「仲間!？何で？」

「同じ近衛軍に配属されている。色は白だ。」

「...よろしく!先輩」

顔は結構かわいいのに今は怒り心頭で感じに崩れてしまっている。

「クワンティーオは?まさか、あの弱そうな奴を使うの?」

俺のヴァルシュナをビッと勢いよく、本当に効果音が付きそうな感じでドア越しに指差した。

「予備が1騎ある。まあ、使えるのはそれを今度ここへ持ち込み兵装してからだけだな。」

さすがに元王様専用とは言えない。

「とにかく二人とも入れ！」

今度は殆ど命令口調。

中に入ってから清瀧は俺にドアの端を指して言った。

「ここに手を置いてくれないか？」

「？」

言われるがままドアの蝶番に手のひらを置く。

清瀧はブツブツと何事か目を閉じ呟いている。

「...の名において...この者を...」

所々しか聞こえない。

「もういいぞ。」

「何だったんだ？今のは」

「お前もこの扉を開けるように記憶させた。」

一種の生態認証みたいなもんだろう。

「じゃあ、あの変な奴退かして！」

まだ居たか。

「退かしてもいいが、その後何処に置いたらいい？」

「いちば〜ん奥にいくつか空きがあるわ。適当でいいわよ。」

ここから見ると照明が無いのか省エネなのかかなり薄暗い。

「あ、そうそう一応名前教えてくれない？」

「片寄...片寄隆一」

「え？かたよせ？」

「ん？」

「いえ、何でも無いわよ。それより、早くあれ退かしてきて！」

さっきの王といい片寄と言う名前になにがあるんだ？」

「君の名前も教えてくれないか？人に名前を聞く時はまず自分からと言うだろ？」

「そんな格言聞いた事無いわよ...まあいいわ。私は宜保政美。色は緑よ。ついでに第3方面隊の指令もかねているわ。」

清瀧の妹と同じ名前か。字も一緒だろうか？

「第3方面隊？」

「あ、言うのを忘れていた。近衛軍の隊員の一部は各部隊の司令官も勤めることになる。お前は一応今度編成する予備兵力の司令官も兼務してもらう予定だ。」

聞いていないぞ？

「司令官は通常は千戸長に任せる事が多い。あまり気にするな。」

とりあえず、宜保政美がうるさいので、ヴァルシュナを動かす事にした。

降りっぱなしになっているワイヤに足をひっかけ、俺をコックピットまで運んでくれた。常時動かしていた発電用のエンジンのおかげで再始動は問題無くすんなりといった。言われた通りに奥へ歩かせ、多分誰も使っていないだろうと思われるスペースへ立たせ、コンピュータを整備用に切り替え、自己診断プログラムを走らせる。自己診断プログラムの表示結果を前面パネルの3インチほどの液晶ディスプレイに表示させて啞然とした。

「問題無しだと？さっきのエラーはどう言う事だ？」

故障発生を知らせるパネルに目をやると、相変わらず機体に重大な故障個所があると言う意味のLEDが点滅してる。

最初の診断では変形システムが故障と表示された。

今回は、問題無し。

約10分位俺はコックピットの中で頭を痛めていた。

悩むのを止め、一旦さっき俺にあてがわれた部屋に戻る事にする。

ヴァルシュナの足元に立ち、ヴァルシュナを見上げた。

さっき、地下で見た王専用のクワンティーオなる巨人を思い出すと、やはりコイツと顔がそっくりだ。

センサー類の関係で、世界中のアーマーの「顔」には二つの目というデザインは無い。

意図的に人間らしさを排除している、と言う噂もあるがどちらかと言うとやはり性能的な問題だろう。

こっちのヴァルシュナも例外ではなく、目に相当する部分はゴーグル風になっている。

そのゴーグル内には小型の近距離用レーダーや各種センサーン、集音装置等が詰まっている。

所謂光学的なカメラは望遠用のみ。

逆に人間みたいに2つの目は機能性がおちてしまう。

この目をのぞくと顔の輪郭といった大雑把なところでクワンティーオのヴァルシュナにそっくり。

「俺の名前といい、こいつの名前といい...そしてこの顔といい、何かあるな...」

とりあえず、しばらくはこいつの出番は無いだろう。

もしかしたら、このまま錆びて朽ち果てるだけかもしれない。

そう思うと、少しだけ悲しくなってきた。

「せめて、空を飛べればな...」

この世界にはまだ半日しか滞在していないが、何となくこの世界には空を飛ぶ乗り物が無いと断言できる。

なら、戦闘に参加するならやはり空を飛べた方がいいに決まっている。

しかし、元々ヴァルシュナは一度アーマー状態に変形してしまったらサポート無しでは戦闘機状態へ戻れない。

アーマーのままこの世界へ来てしまった以上、ここでは二度と空を飛ぶ事は無いだろう。

空が好きでパイロットになった。

ライセンスを取るお金が無かったから空軍に入った。

今の空軍はヴァルシュナのせいで陸軍とあまり区別がつかない...でも、それでも空は飛べる。

俺の居た日本ではこの世界ほど空は青くない。(高度を上げれば青くなるけど)

このティダと呼ばれる世界の真っ青な空を一度は飛んでみたいと思っていた。

「おやすみ」

## VALSHNA～ヴァルシュナ～

<http://p.booklog.jp/book/22512>

著者 : megaroad77

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/megaroad77/profile>

発行所 : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/22512>

ブクログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/22512>